
ハイペリオン戦記

貞次シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイペリオン戦記

【Nコード】

N5042B

【作者名】

貞次シュウ

【あらすじ】

海賊稼業の四人の男たちが、ある晩の嵐によって漂流するはめに。ようやくたどり着いたその土地は、まったく未知なる大陸『ハイペリオン』だった。

第1記（前書き）

とにかくどこまで書けるやら……。ぼちぼち更新しますので、半分
放置して見守ってください。□、（；

第1記

太陽は燦々と大海原を照らし、穏やかな波間はかなりの沖合にもかかわらず、うねりも小さなベタ風ぎである。

上も下も青一色に塗りつぶされた世界。そこにこの四人の男たちが波間に揺られていた。

「ついてねえ……」

その中のひとり、長い金髪を塩水でぐしゃぐしゃに乱したテトラが沈黙を破った。

イライラを募らせていたのはここにいる全員がそうだ。切られた口火にスパチャホフも噛みついた。

「テトラの舵とりのミスやろが！」

「あ、てめえ船長に向かってなんつー口のききかた」

四人は大きな一本の折れたマストに掴まり、すでに二昼夜を過ごしている。先日の嵐の夜、彼らの乗る帆船は大波に襲われてあえなく沈没してしまったのだった。

「このクソ船長めが。死ね、今すぐシロナガスクジラのクソに埋もれて死ね！」

「なにをこの変態船乗りが。お前こそ死ね、ナマコに頭ぶつけて死ね！」

「黙られい！」

二人が口汚く罵りあうのを止めたのは、マークの一喝だった。

「見苦しいと思わぬか」

東洋系の鋭い切れ長の目で二人を一瞥すると、また元の静かな東洋人に戻る。テトラとスパチャホフはバツが悪そうな顔で互いに下を向いた。

「そうだあ、楽しい話とかしたら気持ちも落ちつくなりよ」

この絶望的な状況でもまったく緊張感のない声をあげたのは、最後のひとりチェリー（男）だ。

「おう、なんかしてみいや」

なげやりな表情のスパチャホフとは対照的に、笑顔満面のチェリーは、最近読んだ本の話の切り出した。

「二人の仲の良い夫婦がなあ、バカンスにダイビング旅行に行くなりよ」

「ほおほお……」

「そこでえ、船のスタッフがダイバーの人数を数え間違えて、二人は海の真ん中に取り残されてしまうなり」

「……？」

「そして最後にはサメに食われてしまふなりよ」

「聞きたくねえつつーんだよボケ！」

テトラは腕を振り抜くと、渾身の拳の一撃をチェリーの鼻に打ち込んだ。

ちなみに遅まきながらこの物語の世界観を語っておかねばならない時代は中世後期、しかし舞台は地球に似たどこかの星とでも適当にしておく。したがってダイビングなどは存在しない。

さて、それから更に一日が過ぎた。さすがに生命の危機が間近に迫っていることを感じ取ったのか、言葉は少ない。

テトラはすでに半開きにしかない目ではるか水平線を眺めていた。

「他の奴らはどうだったんだ？」

「どうやらな……」

彼らは世界最大の海賊『エムターン』の一員だった。そのエムターンの偉容は千隻を超える海賊船を擁し、国家の正規軍でさえ海の上では手も足も出ないまさに最強の軍団である。

他の奴らとはすなわち他の海賊仲間のことを指していた。

「我らだけであろうな、このような無様は」

普段からもの静かなだけに、マークの言葉はひとつひとつが重い。加えてチェリーまでもが口を差し挟んでくる。

「だってテトラって五級船舶免許しか持ってないもんね」

「マジかいな、ジェットスキーしか乗れへんやないか」

「バカやろう、四級だ！」

もう一度言つが、この物語の世界観は中世である。くだらない言い争いにも飽きたのでストーリーを進めよう。

「助かった……」

一行はようやく砂浜にたどり着いていた。久しぶりに重力にとらわれた足がやけに重たげに見える。そして引きずるような足跡を残しながら、四人は陸へと上がっていった。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったなりよ。あのあとサメに襲われたり、クラゲの大群に囲まれたりで何度もピンチになったけど、四人の力でなんとか乗り切ってようやく生き残ったなりよー」

「ずいぶん説明的なセリフだな……」

「でもサメとの格闘で傷だらけだし、服も破れてしまって実はみんな全裸なりよ」

「だから誰に話してんだよ」

全裸で砂浜から小さな森を抜けると、比較的往来の多そうな街道に出た。全裸でこの道を巡ればいずれどこかの街に行けるだろう。

「全裸全裸つてうるせえんだよ、ナレーター！」

第2記

さて、一行はここで思案にふけていた。問題はひとつ、この格好ではどうやっても堂々と往来などできるわけがない。

「どうするなりよ」

チェリーの言葉はスパチャホフには意外なものに聞こえたようだ。唾を飛ばして食って掛かった。

「俺たちや海賊やで、ここ通るやつの身ぐるみ剥いだったらええねん！」

「まあ、それしかねえな」

「小者の暴ではあるが、いたし方なかるう」

ひとりチェリーは反対をしていたが、しかし実際にその姿で街道を行く自分の姿を想像すると耐え難くなったのか、最後には同意に到った。

「で、誰がやんねん？」

「言いだしっぺだろ」

テトラの言葉に全員が目がスパチャホフに集中する。

「いやいや、この格好で出来るかい！」

「皆同じなりよ」

「じゃあお前がやれや」

「僕はお腹が出てるから恥ずかしいなり」

そう言つて酒で緩んだ腹を突き出した。まったくもって恥ずかしい腹だ。

「じゃあマークがやれや」

「拙者はモノが大きいので裸では動きにくいのでな」

そう言つて誇らしげに股間のモノを突き出してみせる。

（どんな理由やねん……）

スパチャホフの視線が最後の一人、テトラへと辿り着いた。

「いや、ちよつと乳毛の処理が出来てないから恥ずかしい」

「アホかお前！ 理由になるかボケ」

「何を言つてんだお前……」

急に優しい目を見せたテトラは穏やかな口調で語りかけてスパチャホフの肩を抱いた。

「素晴らしい力二腹じゃねえか」

筋肉質な浅黒い肉体を人差し指でなぞってゆく。

「これだけのボディを人目に晒さないなんて罪だぜ、おい」

「え……ホンマか？」

少しスパチャホフの頬が緩むのをテトラは見逃さなかった。

「まさに芸術だな、お前の体は！」

「いやあ、そんなことあるかもな」

あっさり有頂天になるスパチャホフは小躍りしながら街道に出て行った。それを見ていた他の三人は声を揃えて言う。

「馬鹿で良かった……」

さて、意気揚々と街道に飛び出したスパチャホフは仁王立ちして獲物を待っていた。果たして間もなく木々の間を縫う道を一台の馬車がやってくる。

スパチャホフはその馬車を注視した。

（女か……）

幌をつけた馬車は一人の女が手綱を取っていた。何も知らずに陽光の照らすのどかな道を走ってくる。

（うーん、女物の服ではどないやる？）

しかし迷っている暇もない。たとえ女物の服だろうと裸よりはマシである。スパチャホフは意を決して馬車の前に飛び出した。

「待てや！」

両手を広げて立ちふさがる。突然目の前に全裸の男が現れたことに馬車の女は悲鳴を上げ、両目をふさいだ。

「へ、変態。踏みなさい、レコルト、踏みなさい！」

女の声に応えるようにその黒い馬は前脚を振り上げた。

「え？……げふうつ！」

ドドッと体重五百キロを超える馬がスパチャホフを蹴り飛ばしたあとのしかかっていた。

「フラン、フラン！」

「どうしたのお母様？」

幌の中から年の頃なら12、3歳ほどの美しい少女が顔を出す。そして眼下で苦悶に顔を歪ませるスパチャホフを見て悲鳴をあげた。

「お母様！ 下半身を丸出しにした男が、下半身を丸出しにした男が！」

「見ちゃいけません！ 見ては駄目です」

（げ……げふう……お前が呼んどるんやないけ！）

血を吐きながら悶絶するスパチャホフを見ていた他の三人はと言うと……

「助けるなりか？」

「馬鹿、あんな美しい女性の前にこの格好で出て行けるかよ」

「拙者には出来ぬわ」

とりあえず見てみぬふりを決め込み、いつの間にか雑談に講じている。やがて静かになるとスパチャホフが恐ろしい形相で怒鳴り込んできた。

「お前ら助け来いや！」

「男子たるものがなに泣いておるか」

「顎がずれてるなりよ」

「おいおい、腸がケツからはみ出してるじゃねえか」

一同の爆笑があたりに響いた。

「わははは……って、笑うところちゃうやろが！」

スパチャホフの怒りはひと通りではなかったが、またしてもテトラの甘い言葉にほだされると、はみ出た腸をひきずりながら意気揚々

と街道に飛び出して行った。

さて、今度は徒歩で一人の男が歩いてくる。太った体に『ラムちゃん』と大きく書かれたＴシャツ。そのＴシャツはきつちりとズボンのなかに押し込まれ、顔に食い込むように張り付いた銀縁のデカイ眼鏡、背にはリュックサックを背負っていた。

（なんてダサイ格好だ……）

スパチャホフは不安を覚えた。あの『ラムちゃん』と書かれたＴシャツを自分が着るのかと思うと、それだけで気がめいてくる。

（やむをえん……）

眉間にしわを深くしながらもその男に襲い掛かった。

「な、なんですか？」

「なんですか、やないわ！ 脱げ、今すぐ脱げや」

「犯すんですか？ 僕を犯すんですか」

「犯すかボケ！」

ゴツンと鈍い音と共に男の顎が跳ね上がる。畳み掛けるようにもう一発腹に一撃を叩き込んだ。

ドドのように気絶して寝転がる男の周りで四人はそれぞれ着替えを

行っていた。リュックの中にはこの男の趣味だろうか、様々なコスチュームが入っていたのだ。

「この『ラムちゃん』ってなんのつもりだよ、おい……」

さつきから文句を言いながら男のシャツを仕方なく着込んでいるのはテトラだった。

「じゃあ、俺のと替えろや」

そのテトラを不満げに睨み付けたスパチャホフだったが

「いやいや、それは遠慮しよう」

と取り合うことはしない。

一方マークも不満の声を上げていた。

「なんで拙者がナース服など……」

細身のマークには意外に似合うピンクのナース服だったが、本人にとってはどうしても許せるものではなかったのだろう。

「帽子忘れてるなりよ」

「いらぬわー!」

せっかくチェリーが差し出した帽子を投げ捨てて声を荒らげていた。

そしてその罵声を浴びたチェリーはというと、これまたロリチックなメイド服に身を包んでいた。

「なんでこいつはこんな服ばかり持ってたなりか？」

恐らくはそういう筋のマニアなのだろう、一般人とは違う匂いを漂わせている。その男を見下ろすチェリーに声を掛けたのはまたもやスパチャホフだった。

「頼む……」

「嫌なり」

言葉を待つまでもなく即答を返す。

「なんで俺がコレやねん！」

「いやいや、コレはお前しか着こなせないだろう」

「似合うなりよ」

「まさに貴様のためにあつらえたようである」

「なんで俺だけレオタードやねん！ しかも網って」

黒い網で作られたレオタードは、余すことなくスパチャホフの肉体をさらけ出していた。

「ち。こが潰れてるなりよ」

「じゃあお前が着ろや、この網レオタードをよ！」

「い……いや、その格好で真剣に怒るのは勘弁なり……ぷ」

「じゃんけんに弱いオメエが悪いんだろが」

「俺がコイツ捕まえたんやろが！」

「さて……無駄話はそこまでにして行くぞ」

ナース服に身を包んだマークはさっさと道を歩き出した。それを追うようにチェリーもその場から離れてゆく。

「ま、そんなわけだ。俺も行くぜ」

長い金髪をたなびかせるとテトラも足を踏み出した。

（なんで俺だけこんな格好やねん）

憤懣やるかたないスパチャホフだったが、仕方なく一行の後を追う。そしてようやく奇妙な格好をした四人の長い旅はここに始まったのだった。

第3記

その日は穏やかな小春日和だった。森を抜けるその街道は道々小鳥のさえずりに満ち、ウサギやリスが時折道端を横切つてゆく。

春爛漫といった風情は、あたり一面が喜びに満ち溢れているようでもある。あった。

「それにしても、ここってどこだよ？」

遠くに見渡せる山々の頂を眺めながら、テトラはその疑問を口にしていた。

「どこやるな。パーソロンを出港してからだいぶ南に来たしな……」

「誰もここまでは来たことないはずなりよ」

「……」

時は大航海時代を迎えようとしていた。国家事業として、また財閥は巨万の利潤を得ようとこぞって巨大な船を建造し、未知なる海を開拓して新天地を目指そうとやっきになっていたのだ。

それに乗じたわけではないが、彼らエムターンも巨大になりすぎた船団の新たな拠点を探そうと、未開拓の土地を探している途中というわけだった。

「もしや……」

それまで口を閉ざしていたマークだったが、その話題になると静かに言葉を繋いだ。

「伝説のハイペリオンではないのか？」

それを聞くとテトラにも思い当たる節があるようだ。

「おお……ハイペリオンか……」

「知ってるなりか？」

「いや、全然」

「じゃべるなボケ！」

「……」

ため息混じりに語り始めたマークの話によれば、彼らの住む大陸タイントウより遙か南、灼熱の海を越えた向こうに魔法が支配する伝説の国があると言い伝えられているそうだ。

「魔法ねえ……見たことねえけどな」

テトラにとってはさほど興味が湧くようなものではなかったようだ。むしろ頭から信じていないように見える。

「それより食い物と服が先決だな」

極限の空腹ですでに足元がおぼつかない状況だ。もはや視点すら定

まらなくなってきたのだ。

さっきの男が徒歩で歩いていた割には軽装だったことを考えると、さほど街までは遠くないはず……と、テトラは頼りない脚に鞭打つと、少し歩様を速めた。

歩くことさらに数時間、日が暮れかけた頃に建造物が見えてきた。

それは夕日を背に、黒い影を延々と横たえている。どうやら城壁に囲まれているようだ。

10メートルは遥かに超える城壁が両翼に広がり、その切れ目が見えないほど長く続いている。想像だにしていなかった城砦都市が一行の前に立ちはだかっていた。

「やばいんちやうか？」

「どうするなりか？」

「どうするつつつてもよ……」

道は大きな城門の前に続いていた。

その門は開け放たれてはいるものの、物々しい甲冑に身を包んだ衛兵が両脇に数人控え、また門の上にはおどろおどろしい猛獣か魔物と見られる彫刻が槍を構えてそびえている。

その威容に足を止めた三人だったが、マークだけはひとり、気にする風もなくずかずかと門へと踏み込んだ。

「ちょっと待て、この街のものか？」

銀色の鎧が鈍く夕日に照らされている。マークは特に動じる様子もなくさらりと答えて見せた。

「旅人である。何か不審でも？」

「いや、その服が……」

「趣味である」

静かに、しかし押しの効いた声は衛兵を妙に納得させたようだ。『どうぞ』と言うとマークを通していた。

「やるなあ、じゃあ俺も行くか」

続いてテトラが門を通る。こちらはすんなりと問題があるはずもない。しかし次のチェリーは少し手間取ることとなっていた。

「なぜ貴様のようなデブがメイド服など着ておるか？」

「しゅ……趣味なりよ」

「醜い！ 入ることまかりならん！」

けんもほろろに追い返されようとしていたが、マークが一言『我と同類である』と助け舟を出すと、渋々衛兵は許可を出した。

「じゃあ行くか」

テトラたち三人は早速食料を求めて街の中へと足を踏み出したのだが、その後方では激しく言い争う声が響いていた。

「貴様だけは通ることまかりなканぞ！」

「なんやとコラ、なんで俺だけアカンねん！」

「見えておる！ 不浄なものが見えておるではないか！」

「おのれも持つとるやろが……あ、お前らどこ行くねん。待てやおい！」

三人の耳にはもはやスパチャホフの聲は届いていないかのようだ。

夕暮れの城門にはいつまでも獣のように吼える男の聲が響いていた

おそらくは街の繁華街といったところだろう、月の輝きさえも薄れそうなほど周りには煌々と灯りがともされ、雑多な人々が食べ物を、酒を手に通りを埋め尽くしていた。祭りの喧騒を思わせるこの賑わいは、この街がいかに活気に満ちているかを窺わせる。

道は石畳で覆い尽くされ、レンガ造りの建物が続いたと思えば、木材で組み合わされた東洋風の建物が並ぶ通りもあり、また、それらの通りが集まる広場にはテントを連ねた屋台が人々を集めていた。

「良い匂いだな」

「もう我慢できないなり」

「小者の暴ではあるがいたし方あるまい」

まさに手ぶらで金銭など持ち合わせている筈もない。腸詰を抱え、かじりながら歩いている中年男性に目をつけるとマークが声をかけた。

「旦那、良い娘がいるんですよ。今日は大サービスですよ」

「良い娘？　どんな娘だ」

赤ら顔を緩ませながらその男は黄色い歯を見せて食いついた。

「すごいグラマーですよ、ダ・ン・ナ。しかもメイドコス！」

テトラが胸の前でふくらみを表現すると、その中年男性はふらつく足取りで導かれるままに暗い路地へとついて来る。あとはご想像の通りである。

手厚いサービスを受け、路地に寝転がる男を打ち捨てて遅い晚餐を取る一行。その彼らの耳に鋭い笛の音と男たちの怒声が聞こえてきた。

「そっちへいったぞ！」

「必ず捕らえよ」

「おのれ、逃げ足の早いやつめ！」

ふと通りを覗いたチェリーの目に飛び込んできたのは、十数人の兵隊に追われる一人の男の姿。その男は網のレオタード一枚でひたす

ら駆け、人ごみを掻き分けて逃走をはかっていた。

その混乱をきたす雑踏には女性の悲鳴が飛び交い、まさに騒然といった状況だ。

腸詰をむさぼるテトラがチェリーに事の詳細を尋ねた。

「なんの騒ぎだ？」

「変態が追われてるなり……」

それを聞いたテトラは『ふーん』と言もらしたきり、また食事を続けている。しかし食事を終えた頃、目の前に怒髪を天に逆立てた一人の男が立ちはだかつていた。

「なにしてんねん……お前ら……」

その声は怒気に震え、拳は硬く握り締められている。

「いやお前『なにしてんねん』て……その格好で言われてもなあ……」

「好きで着てへんわ！」

「まあまあ、落ち着くなりよ。ほら、食い物だつてたくさん……僕らの胃に納まってることだし」

「食い尽くしとんかい！」

我慢の限界を超えたスパチャホフと他の三人はついに乱闘を繰り広げていたが、その隙に逃げ出した中年男に気づいたテトラが声を上げた。

「あ、お前のせいで逃げたじゃねえか」

「知るかボケ！」

「まだ金も身ぐるみも剥いでねえのによ。せつかくお前に着せてやるうと思つてたのに……」

その残念そうな表情にスパチャホフの拳が止まる。

「そ……そうやったんか？」

「当たり前じゃねえか、俺たち仲間だぜ」

拳を収めるスパチャホフのその表情には反省と後悔の色が窺えた。

「なあ、もう仲間割れはよそうぜ」

「ああ、すまんかった」

手を取り合うテトラとスパチャホフ。その光景はまさに友情を絵に描いたような美しい人間模様であった。

と、そこへ――

「いたぞ、こつちだ！」

細い路地にどつと兵士らがなだれ込んできた。剣を抜き、鎧の擦れる音が辺りに反響する。

「貴様等も仲間か!？」

隊長格と見られる先陣を切って駆けてくる男の問いに

「助けてください、変態に襲われて……!」

と、テトラは即答することに間髪を入れなかった。

「お、おま……」

スパチャホフには反論する猶予などない。

「ぬおお、こやつ。男色を好むとはますます破廉恥なる賊!」

大声で喚きながら猪を思わせる隊長のタックルをかわすと、さらに後続の兵士が次々と繰り出す剣先をかわす。

「おのれら、覚えとけや!」

捨て台詞を吐いたスパチャホフはそのまま夜の巷へと駆けて行き、そしてテトラたちは宿を探すためにその場を後にした。

第4記

さて、一夜明けたこの日も陽光穏やかな好天に恵まれていた。

その昼にもなろうかという時分、レストランを兼ねた小さな宿屋から出てきたのはテトラ、マーク、チェリーの三人である。

遅めの朝食を済ませた一行は、とある店へ逃げるように駆け込む。しばらくすると、服装も新たに誇らしげに店を出てくる姿があった。

「マーク、その格好……もうこの国の人間みたいだな」

そう言われて改めて自分の服に目をやるマーク。濃紺の麻布に前襟を重ねて太い帯で留める上着に、すこしゆったりした作りの、やはり濃紺のズボンに黒のブーツを履く。

さしずめモンゴル風作務衣といった風情だ。

テトラたちには見慣れているはずのいままでの服装よりもむしろ自然に見えるのは、その東洋人の顔立ちのせいだろう。加えて長い黒髪を後ろに束ねたせいもあるようだ。

一方のテトラと言えば、意外とシックないでたちを見せている。

襟のないベージュの前開きシャツに茶色のズボンをサスペンダーで吊り、やはり茶色の革のベストにジョッキーマフラー。首元にワインレッドの麻のマフラーを巻き付けただけで、以前のアクセサリーをこれでもかと飾り付けていた名残は微塵も見られなかった。

さて、チェリーと言えば、こちらは少し物々しいでたちである。素肌に鎖帷子をまとい、襟と縁取りにファーをあしらったグレーの厚手の革ベストは、肩にプロテクターが付けられ、セミシヨートの黒いレザーパンツ。そしてやはり革のリストカバーと編み上げた鉄芯入りのワークブーツに身を包んでいた。

「二人ともそんな軽装で大丈夫なりか？」

チェリーは振り返って二人に聞いた。

「たかがゴロツキ退治、俺達や最強海賊エムターンの切り込み隊だぜ」

そうつぶくテトラは、若い娘にすれ違いざま口笛を吹いた。

「マークは……」

その問いが無意味であると言わんばかりにうつむいた視線を上げようとしないうともしない。

「心配するまでもないなりね」

首を返したチェリーは、何やら地図の描かれた紙切れを取り出して辺りを見回した。

夜の喧噪とはまた違った賑わいで溢れている。夜の屋台はバザーに姿を変え、売り子の声が飛び交い、それらはひとつの騒音のように溶け合って、この雑踏に馴染んでいた。

その中でチェリーは目指す店を見つけ出したようだ。他の二人に声を掛けると、我先にとテントの屋根を潜った。

「はい、いらつしゃい。何をお求めで？」

揉み手をしながら頭にダーバンを巻いた店の主人が声を掛けてくる。

テントの中に足の踏み場もないほど剣、槍、弓矢など、あらゆる武器が転がっているとところを見れば、そこがどのような店かは今さら説明する必要はないだろう。

チェリーと後に入ってきた二人も無言でそれらを見渡した。

「みなさんゲノハンターの方で？」

店の主人の言葉に三人は頷いた。

さて『ゲノハンター』という言葉を少し説明せねばならない。時をちよつとだけ遡った昨夜のこと――

「へえ、お前さんたちターンントウから来たのかい！」

その宿の主人は馬鹿がつくほどのお人好しで、更に言えば好奇心旺盛だった。

今し方、裏通りでちよつとした小銭を通行人から拝借したのだが、貨幣価値が分からない一行は恐る恐る呼び鈴を鳴らした。

出てきたのはなかなか恰幅の良い禿げ散らかした親父であったが、事情を話すとカウンターから身を乗り出して興味を示したのだった。更に嬉しいことには、くすねた金は意外にも多額でしばらく宿泊出来るだけのものではあったが、話を聞かせる代わりに二、三日無料で泊めてくれるという事だった。

「で、ここはやっぱりハイペリオンなのか？」

「ほ、知らずにここまで来たのかね。まあまあ、酒を用意するからテーブルに座って座って」

酒という言葉に目を輝かせたチェリーが真っ先に席に座る。やがて主人が持ってきたのは、初めて見る透明な蒸留酒だった。

発酵酒しか知らない三人は、喉に一気に流し込んで目を回した。

「なんだこりゃ！」

「主人……まさか一服盛ったのではあるまいな」

「めっそうもない！」

咳き込むテトラとマークに両手を上げて弁解する主人の前に、チェリーがいつにない据わった目つきで腕を振り上げた。

「うまい、もう一杯なり！」

どうやら酒好きに国境はないようだ。それから話そっちのだけで、独り酔いに身を任せている。

それを横目で眺めながら主人は語り出した。

「お前さんたちの想像通り、ここはハイペリオンだ。と言うかここを目指してきた訳じゃないのかね？」

「いや違う。単に新天地を探してたら、たまたま遭難してな。漂着したのがここだったわけさ」

「テトラの舵取りミスなりよお」

「変な時だけツツコミ入れんじゃねえぞ、テメエ」

二、三発チェリーのわき腹に拳を叩き込むと『さて』と話を続けた。

「じゃあよ、ハイペリオンってのは魔法に支配された国じゃねえの？ 見たところ、魔法なんてどこにも無えけどよ」

「魔法に支配……かつてはそうだったと言えるかも知れんがね、ちよつと複雑だ」

「複雑……？」

「ハイペリオンにはもはや魔法は存在せん。あるのは魔法を操っていた王族の末裔と……」

そこで主人はいったん言葉を飲み込み、そして伏し目がちに言った。

「グロースタークから流れてきたはぐれゲノだけだ」

「あん？ そのグロースタークとかゲノとか言う奴はなんだ」

どうやら不穏な話の雲行きになってきたようだ。テトラは唾を飲み込んで主人の言葉を待つ。

「どっちも酒の名前なりよぉ」

「この、酔っ払い豚めが……」

鈍い音を立てて、再び数発の拳がチェリーのわき腹に突き刺さる。

『きゅう……』と息の根を止めたチェリーをさらに脇へ押しやると、改めて主人に問うた。

「そうそう、酒の名前じゃあゝ、ウー」

「テメエまで酔っ払ってんじゃねえよ！」

かくして、翌朝改めて聞いた事の次第を説明しておく。

ハイペリオンはかつて栄華を誇った大帝国であったが、それを司っていたものは巨大な魔法力であった。

それはもはや伝説となっているが、山を貫き、海を覆すほどの偉大なる力だったと言う。しかしその力は徐々に失われ、今ではそのかつての威光のみを頼む王族によって維持されていた。

それでも国は富み栄え、国民は不自由も不安も強いられることなく、その暮らしぶりは幸せに満ちていた……

そう、属州グロースタークが反乱を起こすまでは。

「で、そのグロースタークが使う兵士は人間とはちよつと違う『ゲノ』と呼ばれる半獣人で、たまに流れ者のゲノが危害を及ぼすなりが、その流れゲノに殺された人の遺族が敵討ちを頼むなり。そのゲノをやつつける仕事は『ゲノハンター』なり」

「お客さん、誰に説明してんです？ 買うんですか、買わないんですか？」

チエリーの説明台詞にしびれを切らした主人は、差し出した剣を振って苛立ちを見せた。

「あー、あれは放つとけ。その剣を見せてくれ」

「拙者にはその戟を……」

マークは意外にも使つところを見せた事がない戟けきを所望した。

一見すると槍のようだが、その穂先には三日月状の刃が背を向けて付いている。突くと切るを同時に繰り出せる東洋の武器であるが、使いこなすのはいささか難しい。

「お目が高い、それは方天画戟という銘の超一品ですよ！」

「ほう……」

手に取りじつと見つめたかと思うと、マークはいきなりそれを横殴りに振り切った。

「ひい！」

「うわっ」

主人とテトラの鼻先を一閃の光が走る。しかしそれはすでに残像で、戟先はすでに反対側の空を斜めに切り裂き、その軌道を目で捉えようととしても、次には頭上で光が孤を描いていた。

その超絶な技に店の主人は目を剥いて驚きを隠さない。

「素晴らしいお手並み！ 長年こんな商売やってますが、こんな早業初めてお目にかかりましたよ、いや、さぞ名のあるハンターの方とお見受けしますが、失礼ですが……」

まさしく絶賛する主人ではあったが、マークいわく

「戦場以外で名乗る名など無い」

と、にべもない。

「ああ、こいつはマークなりよぉ」

「いらぬ口を叩くな！」

「あつっ！ 何するなり」

「お……お客さん？ お腹に刺さってますが？」

半泣きで腹を押さえるチェリーを無視して、テトラは一本の長剣を手にしていた。

柄に手を添え、スラリと鞘から抜き取ると、両刃の剣はテントの中にあっても眩いほどの光を放つ。

「いいじゃねえか……」

白い歯をほころばせてその刃渡りを見渡すと、ヒュンとこちらも一振り剣先を走らせた。再び驚きの目を向ける主人の目の前でいくつも光の軌跡を残して舞う剣身。その疾さは通りの人々の目をも奪った。

たちまち人だかりが出来たテントの中で、ようやくテトラが剣を鞘に収めた時は盛大な拍手がわき起こっていた。

「すごいぞあんた！」

「キヤー！　かつこいい」

「たまげたよ」

次々と寄せられる喝采に、生来派手好きのテトラは胸に手を当てて、おどけて応えて見せていた。

「マークには負けてらんねえからな」

そう言つて当人にウィンクしてみせた。

「ふん、脇が甘いわ」

しかしながら相変わらずノリの悪いマークである。

「けっ……ところでいくらすんだ、コレ？」

今頃気付いた二人は、長剣にぶら下がっている値札に目をやった。その札に書かれてある値段はなんと『1000000G』。

Gとはこの国の通貨単位『ゲソ』である。

（10万ゲソっ！）

さらに恐る恐る方天画戟に目を移すと

（15万て！）

テトラとマークは有り金を両手に広げてその金額を計算しだした。

「いくらだ？」

「500ゲソしかない」

二人背を丸める姿に主人が容赦なく声を掛けた。

「おや、どうかしましたか？」

「いやいや、なんでも」

目を泳がせながら曖昧な返事を返したテトラだったが、しばらくモジモジしたあと、店の主人に声を掛けた。

「なあ、500ゲソだったらどんな武器があんの？」

「500ゲソ？」

その金額は思いのほか低い金額だったのだろう。しばらく首をかしげると、思い付いたようにポンと手を叩いた。

「ありますよ、お客さん」

何やらテントの奥の大きな箱の中を漁っている様子だったが、やがて一本の短い棒を持ってきて差し出した。

しかしそれはどこから見ても普通のリコーダにしか見えない。つまりは……たて笛だ。

「おい、これは？」

「どうです、パツと見たて笛にしか見えないでしょう」

「それ以外の何ものでもないぞ」

眉間にシワを寄せたテトラは食ってかかった。しかしそれを見越したように主人は笑みを浮かべ『ノンノンノン』と、人差し指を左右に振って見せるだけだ。

（なんでフランス語よ……）

「実はこれは吹き矢なんですよ。何と笛に見せかけた吹き矢！」

（笛に見せかける意味が解らんぞ……）

「さあ、どうします？ 買います？」

（何で上から目線なんだよ？）

バザーを後にした三人は、肩をひどく落として東洋風の建物が並ぶ通りを歩いていった。赤を基調とした建物は金銀、緑などきらびやかな色彩で化粧を施されている。

さて、テトラはその手に握っているたて笛を眺めながら悪態をついていた。

「まさか武器がこんなに高いとは思わなかったぜ」

「剣が10万、戟が15万、僕が欲しかった金剛棒が5万。合わせて20万ゲソなりよ」

「20万かあ……コツコツかつあげするか？」

その言葉にマークは無然とした表情を見せた。

「我らは海賊とは言え義賊であろう。我が身を犠牲にして悪を討つ、滅多に堅気の者を害してはならぬ」

「え、いや昨日は？」

「あれは妙な服を替えるためだ。致し方あるまい」

（我が身を犠牲にって言ったじゃねえか……）

たまにマークの言うことは腑に落ちない。テトラは半目で疑心を露

わにして睨んでいたが、ふとその彼の向こうに立て札が立っているのを認めた。

数人がそれを囲んで、何やら話し合っている風を見て興味が涌いたのだろっ、吸い寄せられるように三人はその前にたった。

「げっ……っ！」

「むっ！」

「あーっ！」

そこに書かれていたのは手配書であつたが、その人相書き……といふか服装書きに目を奪われた。

半裸の男が黒い網のレオタードを着込み、半笑いで踊っている絵だ。そして股間には丁寧に『自主規制』と書いた紙が貼られてあつた。

「まるで変態だな」

「顔はもう少しブサイクなり」

「というか各々、下の方を見よ」

ん、と目を向けたそこには懸賞金の額が書かれてある。その金額に一同は歓声をあげた。

「20万ゲソだと！」

昨夜の騒ぎは想像以上のものだったようだ。罪状には『露出、騒乱、門破り』とある。傍らの中年女性らは口々に昨夜の騒動を噂しあっていた。

「あたしに見せつけるようにして走り去っていったのよ！」

「干してあるあたしのパンツ見てニヤニヤして、気持ち悪い」

「あたしなんていやらしい目でじーっと睨まれたんだから。絶対あたしで妄想してたんだわ！」

揃ってトドのような体を揺らしながら罵ること甚だしい。

しかし今のテトラとチェリーはそんな話を聞いてにやけた顔を作っている訳ではなかった。瞳の奥にたくらみを示す光がキラリと光っている。

「な……おぬしらまさか？」

そのたくらみの意味するものに気付いたマークは二人を蔑視するような目で見た。

「ならぬ、仲間を売るなどならぬぞ」

「へえ、じゃあマークはこの笛で戦うんだな？」

三日月の目で笑うテトラは、たて笛をピコピコと振って差し出してくる。

恐らくはそれを手に立ち回る自分の姿を想像していたようだが、厳しく睨んでいた目を足下に落とすと、一言

「やむを得ん……」

と言った。

第5記

「おのれら、ホンマに殺す！」

手首を通した首枷に繋がれたスパチャホフを前に、テトラ、マーク、チエリーの三人は賞金の手形を手に取りにやけた顔を隠さなかった。

「静かにせい、この変態が」

守備隊隊長が首枷の鎖を引っ張って恫喝する。バランスを崩したスパチャホフはその隊長を鋭く睨み、不満を露わにした。

「貴様、そんな目をしてると益々罪が重くなると見えよ」

その言葉にテトラたちも首を縦に振って頷いた。

「超殺す！」

その捨て台詞を最後にスパチャホフは馬に牽かれた檻車へと乗せられる。

「ちゃんとお努めするんだぞ」

「ホモに走らないように注意するなりよお」

檻の中から中指を立てる姿が哀れでならない。そのまま石畳をカラカラと鳴らして檻車は雑踏の中に消えていった。

国営銀行で換金した一行は早速武器屋で例の得物を購入すると、飛

ぶようにしてゲノハンター登録所へと向かっていた。

「こんなボロい商売がありや、幾らでも稼げるな」

テトラ一行には金が必要な訳がある。しかしそれは当面の生活のためなどと言うものではない。彼らは海賊である、船が要るのだ。

「ガレオン級のヤツでも買えるかも知れないなり」

海賊とは言っても略奪、強奪行為だけで渡っていけるほど世の中甘くはない。人数を集めなければ漕ぎ手も要るし、戦闘要員も要る。それらに与える褒賞も用意しなければならなし、食料だって必要だ。

力だけでそれらを得ることも不可能ではないが、どうしても様々な勢力との衝突は避けられない。そんな事をすればエムターンを探して合流する事など夢のまた夢となってしまう。

やはり金。それらを成し遂げるには金しかないのだ。

やがてその目的の登録所が近くなると、通りを行き交う人間も様変わりを見せ始めた。それらしいいかつい武装をして、目つきも悪党のそれだ。

「あそこか？」

テトラに聞かれてチェリーが地図を確認する。間違いはないようだ。レンガ造りの無骨な建物の玄関には意外にも多くの人間が出入りしていた。

「俺らの獲物残ってんだろっな……」

そんな不安が三人の頭をよぎるほどだ。

しかしそんな不安は無用なものだった。

「さて、何番って言ってたっけ？」

右も左も分らないゲノハンターという世界。むせ返るような男たちの熱気が渦巻く広い室内を見渡しながら、テトラは宿の主人の言葉を思い出していた――

「51番のゲノをやっつけて欲しいんだ」

朝食を取りながら話を聞いていた三人に禿げた頭を下げて見せた。

「51番？」

ベーコンを飲み込んだ後、その意味を聞き返す。

宿の主人に手っ取り早く金を稼げる仕事を聞こうとする前に、宿の主人のほうからゲノハンターの話を持ち出されたのだ。三人は少々話がうますぎるなと思ったのだが、それはこんな訳だった。

「その51番のゲノに俺の息子が食われたんだ」

「その敵討ちなのか？」

「ああそっだ。依頼主は俺だ」

「いいだろう。まずそいつを殺してやるよ」

「そうか、恩にきる！」

わざわざこんな異邦人に頼むこともないだろうに、といぶかしんだテトラだったが、断る理由もないし、それにかなり高額な報酬があると言う。

「で、どんなヤツなんだ、そのゲノってやつは」

「まあ、獣と人間の中間みたいなものだ、ちょっと凶暴な猿だと思えば良い。なに、ゴロツキに毛が生えたようなもんさ」

と、宿の主人は軽く説明していたのだが――

登録所のカウンターに行くと若いインテリっぽい男が受付を行っていた。そこで

「51番のゲノを倒したいんだが……」

と告げると、それまでざわついていた室内が一瞬で凍りついたように静まり返った。

「え……51番ですか？」

「あ、何か都合悪いのか？」

「いえ、そういう訳ではないんですが……」

異様な雰囲気の中、たむろしていた十数人のハンターたちの中の一
人が声を掛けてきた。

「あんたもしかしてシャカールの親父に焚きつけられたんじゃない
えか？」

シャカールとは察しのとおり、一行の泊まっている宿である。

「ああ、そうだが」

「やっぱりな、やめとけつて。命を粗末にするだけだぜ、どうせ簡
単に稼げるとか何とか言われたんだろ？」

「そりやどついう意味だ？」

「どついう意味つて……あんた51番の話を知らねえのかい？」

「51番も何も、ゲノつてのも見たことねえしな」

その言葉に周りの人間は絶句して、そして再びざわめいた。

「ゲノを知らねえつてどついう意味だ？」

「馬鹿じゃねえの？」

「無謀にもほどがあるな」

「自殺したいんじゃないの？」

口さがない野次馬は口々に彼らの無茶ぶりを嘲笑して止まない。テ
トラはそれらを見無視して受付の男に尋ねた。

「で、どうすりゃ良いんだ？」

唾を飲み込んだ受付の男は

「では」

と言葉を発して一本の巻物を取り出した。それがどうやら手配書のようだ。

紐をほどいて早速中を開いてみると、まずは当該ゲノの潜伏場所、そしてなにやら数が記入されている。

「ん……この約20体てのはなんだ？」

受付の男はその言葉を聞いてため息を深くした。

「本当に何もご存知ないようですね。それは群れの数です。ゲノは群れで行動しますからその数を示したものです」

「はあ？ 一匹じゃねえのか？」

「もちろん一体を倒すだけで結構ですが、その群れの中で一体だけを倒せば……の話ですね」

「つまり……」

「群れ全体を相手に戦うことになります。ちなみにこの51番は近郊で最強最悪と恐れられていて、軍隊でも手をこまねいているほどです。失礼ですがあなた様はどの位の規模の軍隊を引き連れていますか？」

何やら随分と話が大きくなってきたようだ。テトラは他の二人を返り見て

「こいつらただだぜ」

と言った。

どつと室内は爆笑に包まれた。その意味が分からない訳では無かったが、テトラには失望するようなところは無い。さらにその手配書を広げて続きを確認してゆく。

しかしその先はテトラにさえ驚くようなものだった。

「おい、この人相書きはなんだ？」

何人もの人間の顔がそこには描かれている。恐らく殺された人間の顔であるうが、それをここに描き示す必要性が見当たらない。

「それが51番に囚われている人々です」

受付の男は静かにそう言った。

「おいおい、殺されたんじゃないかって囚われているだけなのか？」

「正確に言えば魂を囚われているのです」

「魂を？」

やれやれと言った風に首を振った男は眉根をつまんで聞いた。

「あなた方はどこから来たのです？」

「ターントウのパーソロンで町だ」

「ターントウ！」

事の成り行きを見ていた野次馬からも一斉に驚きの声が上がった。どうやらハイペリオンの人間にはターントウは広く認知されているようだ。

「一体どうやって……」

「そんなことはどうでもいいだろ？　なあ、もう少し詳しく話してくれよ」

周りの喧騒をよそにテトラはずいといと詰め寄る。しばらく口を閉ざして黙考をしていた男だったが

「いいでしょう」

と言って語り始めた。

「ゲノとは元々魔界の住人で、この世に実体を持って現れることなど滅多にありませんでした。稀に召喚術などによりその姿を現していたのですが、その業は久しく封印されていたのです」

「それを復活させて兵士にしたのがグロースタークって訳だな」

「そこまでご存知でしたら話は早い」

「そんな背景なんてどうでも良いんだ、俺たちやよ。ゲノって猿のことを詳しく聞きてえんだ」

そこからの話は宿の主人から聞いたものとは随分と違うものであった。

「ゲノは人間を食べるとその魂を取り込みます。その魂は天国へ行くことも出来ず、ゲノの中でずっと地獄の苦しみを味わうのです。そしてその魂を糧にして自分の体を大きくし、力を強大にしてゆきます」

「てことは強いヤツは更に強くなっていくんだな」

「そうです。51番はすでに確認できるだけでも30人を食べています。その力は推して知るべし……です」

後ろで話を聞いていたマークとチェリーは顔を見合わせて口を曲げている。どうやら話が違うと言いたげだ。

「じゃあよ、この人相書きの意味は何なんだ？」

「魂を取り込まれた人間はゲノの腹にその顔を浮き上がらせるのです。ですからその人相書きで目標のゲノを確認します」

「顔が浮き上がってるのか？」

思わずその悲惨さを想像して顔をしかめた三人だが、次の言葉はさらに凄惨なものだった。

「はい、そしてずっとうめき声を上げ続けているのです……ずっと。死ぬことも出来ません。肉親の名前や助けを求める声……それは」

「もういい、わかった」

テトラの目がいつになく怒りに燃えていた。手配書を握り締めると敢然と言い放つ。

「おい、こいつは俺が倒す。手え出すんじゃないぞ」

「おお、頑張つてなりよ！」

「お前もやるんだよ、この野郎」

一同が呆れ顔を見せるなか、テトラはずかずかと登録所を後にした。その場に残された者たちは首を横に振り、三人の未来が絶望なのを確信してやまなかったのだった。

第6記

城壁にいくつか設けられた門。その中の西門から真つ先に飛び出していったのはテトラだった。その姿を追うチェリーは、傍らのマークに多少の愚痴を並べていた。

「ちょっと無謀なりよ、テトラは焦ってるなりか？」

「……」

「マークは勝てると思ってるなりか？」

「……弱ければ死ぬだけだ。やって見ぬことには分かるまい」

「死んでから分かりたくないなり」

51番とナンバリングされたそのゲノの棲家は最も最強最悪と恐れられていたにも関わらず、最も近い場所にあった。どれほど手をこまねいていたか、想像に難くないものだ。

西へ三キロほど進んだ森の中にある古城を占拠していると手配書には書かれていた。やや上り勾配のついた鬱蒼と茂る森の中を通る道、その雰囲気はすでに妖気に満ちていて、日が高いにも関わらず視界は暗く見通しは利かなかった。

そこを脇目も振らず歩いてゆくテトラは、まるで人が変わったかのように殺気を漲らせている。

「テトラがあんな顔見せるのは初めてなりよ」

「まあ、仕方なかつた」

「仕方ないって、何が？」

「……まあ、本人に聞いてみることだな。拙者からはなんとも言えぬ」

チエリーは眉毛を上げて口を曲げると、そのまま黙ってしまった。

そのまましばらく歩いた時だ、森の中を走る影にマークが気付いた。微かに見えるその影はひとつではない。数十にも及ぶだろうか？

その影はそれほど数で移動しながらも、ほとんど物音を立てることなく、右から左へと飛ぶように森を疾走してゆく。その向かつている先は街の方角だった。

「テトラ」

「ああ、どうやら入れ違いみたいだな」

その影に気付いたのはマークだけではない。テトラもその足を止めて森の中を窺っていた。その目線の先にもう一つ、一際大きな影が走るのを見逃さない。

「あいつだ……」

やや遅れて、しかし他の影と比べてみれば三倍はあるつかという巨躯が木々の間を一瞬で駆け抜けた。

「うむ、追うか？ 待つか？」

「追ったほうが良さそうだ」

街の方角へと走っていくのが気になったテトラは追うという選択肢を選んだ。今来た道を引き返すべくきびすを返す。その時、チェリーの叫びが森の中に響いた。

「うあ、ちょっと見るなり！」

「どうした！」

そのチェリーの驚きようは尋常ではなかった。一箇所を差す指は震え、その目は大きく見開かれている。テトラとマークはその視線の先を注視した。

「こんなでつかいカタツムリ、初めて見た……」

次の瞬間、鈍い音と共にテトラの強烈なハイキックが炸裂し、頭をぶつ飛ばされるチェリーは、鼻血を噴き出しながら白目を剥いた。

「……なりよ」

うつ伏せに倒れたチェリーの尻に、マークが容赦なく方天画戟を突き立てる。チェリーは「ぶぎー！」と一声鳴いて立ち上がった。

「ひどいなりよー」

一行は先を急ぐ。テトラは嫌な予感を拭うことが出来ないで居た。はぐれゲノと呼ばれる獣は、縄張りを持つという。だとすればその

攻撃行動はほとんどが侵入者に対するものに限られるはずなのだ。

それがテリトリーを離れて移動するということが解せなかった。しかもその姿からは明らかに殺気が発せられていると感じていたからだ。そんな不安が的中するかのように、遠く街の方角から激しく鳴らされる鐘の音が響いてきた。それは時を刻むようなものでは決して無い、明らかに危険に対する警鐘だった。

テトラとマークは顔を見合わせて地面を蹴る。チェリーが遅れて二人を追って駆け出した。

「街を襲ったつてのか？」

「恐らくそうであろう」

「そんな奴らなのか？」

「わからぬ……」

すぐに西門に戻った三人の前に無残な衛兵の死体が転がっていた。二匹の獣がその鎧を剥いで喰らいつこうと舌なめずりをしているところだ。

初めて見るゲノという獣は、想像していたよりも異形で、およその世の生物とは思われない。真つ黒な体は毛に覆われ、小さな頭には目というものが見えない。そのくせ口だけは大きく開き、その牙は長く凶暴な爬虫類を思わせた。

「ゴロツキに毛が生えたみたいなんだったって言ったよな？」

「飲まれるでない、テトラ」

その姿にさすがに足を止めたテトラとチェリーを置いて、方天画戟を一振りしたマークが堂々と近づいてゆく。気付いたゲノらは赤子が泣くような叫びを上げて振り向いた。

血塗られた口を開き、長い舌を伸ばす。人間に似た手は長い爪を持つてはいるが、さらに衛兵から奪った剣をも握り締めていた。太ももがわずかに脹らみ、その力をためているのが分かる。

マークはなおも斜め下に戟を下げたまま、無防備に歩み寄った。

獣のように見えても、間合いを計っているところを見ると戦闘に対する本能は研ぎ澄まされているようだ。そして知能も決して侮れるようなものではないと見当をつけていた。

シンクロしてゆく双方の呼吸。マークは未だ自然体を崩してはいない……が、その距離は間もなく間合いの限界点だ。

その光景を眺めるチェリーは手の平に汗を滲ませ、呼吸すら忘れて凝視していた。

極限まで溜め込んだエネルギーを爆発させるかのように、二匹のゲノは地面を蹴った。その瞬発力は人間など遥かに凌駕している。石畳の表面が削れ、破片が後方に飛び散った。

まさに打ち出された弾丸。一瞬でその距離を縮め、手にした剣は違うことなくマークに向けられていた。しかし――

「足らんな……」

まさに一瞬、どちらの獲物から斬ったのかすら分からない。耳障りな叫び声が辺りを満たした。

一方のゲノは血を噴き出しながら宙を舞い、もう一方のゲノは叩きつけられ、土に塗れて滑走しながらテトラらの前まで転がった。

マークは顧みることすらしない。遅れて降り注ぐ血しぶきを潜りながら、戟を振って血のりを振り払うと、そのまま門内へと足を進めていった。

「相変わらず鬼強いなり」

「あいつ見てるとゲノが可愛く見えるぜ……」

足元に横たわる醜悪な獣の死体すら、マークの強さの前では哀れにさえ思えてくる。それはさすがにエムターン最強を誇る切り込み隊においても、頂点と崇められた戦士の姿と言えた。

とりあえずマークに付いていけば大丈夫なりよ」

「悔しいが、確かにそうだな。あいつは最強だ」

その言葉を聞いたチェリーは口元に笑みを浮かべる。

「最強つてのは……ちょっと違うかも知れないなりよ」

チェリーの言葉を聞いてテトラは「なるほどな」と答えて見せた。そして門を潜ろうとした時だ、ゲノの動かない骸が突然光を放った。

「なんだ……こりゃ？」

その光と共に薄いモヤが立ち上る。咄然として眺める三人の目の前で、そのモヤは次第に形を成した。顔が現れ、ついで体が形作られてゆく。それはまさしく人間だった。

「まさか……」

驚愕するテトラの前で姿を明瞭にした男の像。その顔には笑顔が浮かび、感謝の意を込めた両手は胸前に合わせられている。そしてそのまま空中に浮き上がると天高く昇っていった。

「あれが囚われていた魂なりか？」

「……ああ、どうやらそのようだな」

それを眺めるテトラの目つきが怒りに燃えているのをチェリーは見逃さなかった。そのテトラはスラリを腰の長剣を引き抜くと、戦闘体制に入る。門の中からは叫び声がいたる所から響いていた。

「一匹残らず殺してやるよ」

そう呟いたテトラは踊る殺戮マシンと呼ばれている。その姿はダンスを舞うようにして敵を切り伏せてゆくところからつけられたものだが、チェリーに言わせればその強さはマークにさえ匹敵すると断言できた。そして二人が本気になった姿を想像すると、恐怖よりもむしろ楽しさが湧いてくるのだった。

「それにあいつが加わったら……」

その先の想像はこのあと現実となる。

バサーの混乱がここに極まっていた。逃げ惑う人々の中に飛び込んだゲノが縦横無尽に走り回り、その鋭い爪と牙で無差別に殺戮を繰り返していたのだ。武器を持つ男も我先にと逃げ出す始末で、逃げ遅れた女、子供は真っ先にその餌食となっていた。

「第八警備隊の名に懸けて、命を惜しむな！」

その騒乱に遅れて駆けつけてきた警備隊を率いるのは、昨夜スパチャホフを追っていた隊長だ。ヒゲに唾のしずくを垂らしながら、剣を掲げて突撃を命じた。

「これ以上の狼藉、許してなるものか！」

隊員らの「おお！」と勇ましく呼応する声を背に飛び出した隊長だったが、すぐさまその異変に足を止める。振り返ると後続の隊員らが温かく見守っていた。

「隊長、頼みますよ！」

「伝説を作ってください！」

「星になれ、隊長！」

額に血管を浮き上がらせた隊長は、目の前に迫ってきたゲノを捨て置いて慌てて戻ってきた。

「お前らも突撃せんかー！」

「隊長、また血圧上がりますよ」

「大丈夫、ゲノは加齢臭に弱いつて聞いたことがありますから」

と、そんなところへゲノが襲い掛かってくると、その部下らはクモの子を散らすように逃げ帰っていった。

「おのれ、ワシ一人でも……」

振り下ろされた爪を剣で凌いだ隊長は、それでもひるむ事無くもう一方の手で抜き出した手裏剣を喉元に突きたてた。奇声を発して一旦飛びのくゲノだったが、刺された首を一撫ですると、改めて体勢を整えて向き合った。

そのころ、ここは警備隊が常駐する本部である。その中には囚人を収容する牢獄があり、その中にスパチャホフの姿があった。

「なんや、えらい騒がしいのお」

建物内で矢継ぎ早に下される命令はどれも雷声で、その騒ぎは少し離れた牢獄内にも聞こえてきていた。また、外の騒ぎも漏れ聞こえてくるが、そのどれも尋常ではない叫びが混じっていた。

「おい、看守。看守！」

牢獄の並ぶスペースは天井の高い広いホールにあり、そのホールの隅に張り付くようにして囚人が収められる檻がある。そこから入り口で突っ立っている看守を呼びつけた。看守はちらりとこちらに視線を向けただけで、またすぐに視線を戻す。

「コラ、何無視しとんねん、殺すぞボケ」

その横暴な言葉遣いにムツとした看守は、警棒を手につかつかと歩み寄って来た。そして檻の前に来るなり、鉄格子に向かって警棒の一撃を食らわした。突然ホールに響き渡る金属音に、他の囚人たちの肩が竦む。しかしスパチャホフの表情に変化は見られなかった。

「おう、外の騒ぎは何やねん」

看守の挑発など毛ほども感じていないようだ。自分の聞きたい質問だけをしゃあしゃあと口にすると、鼻くそをほじくってそれを飛ばした。

「貴様、そんな態度で長生き出来ると思うなよ」

精一杯の強面で睨みつけてくる看守だが、百戦錬磨の海賊にとって、はむしろ好ましい顔に映る。

「わしの質問に答えや。何の騒ぎやねん」

「貴様なんぞの知ったことか」

外の叫び声が一際大きくなる。次の瞬間、激しく壁が壊れる音と共に眩しい太陽の光がホールを満たした。続いて崩れた壁が床に散らばり、硬質な音が反響する。差し込まれた光に照らされて舞う土煙、その中に黒い大きな影は舞い降りた。

看守は目を見開き呆然とその影を眺めていたが、突然我に返ると懷から鍵を取り出して檻の鍵を開け始めた。

「おい、何やアレは！」

「馬鹿、静かにしろ」

入り口を塞ぐ格好で立ちはだかるその影から逃げようというのだろう、看守は慌ててスパチャホフの檻に逃げ込もうと鍵を差し込んだ。しかしその鍵が見つからないのか、震える手が次々と挿しては抜き、挿しては抜く。

「ありや何や言つてるやろが！」

「ゲノだ……しかも……」

その時、軽い金属音と共に施錠が外れた。しかし「51番……」そう言いかけて扉を開いた看守の姿がそこから消えた。続いて悲痛な叫び声が降り注ぎ、そして次の瞬間、首を無くした死体が冷たい床に落ちた。

「おい……」

じつとその光景を見据えたスパチャホフの目がその影の実体を捉える。小さく泣き声を上げたその影は優に三メートルは超えているだろう。そのとき異様な声が聞こえてくるのに気がついた。眉をひそめて耳を澄ます。

『たすけて』『お母さん』『殺して……頼む』

苦悶と恐怖が入り混じった声は間違いなく人間のものだ。その影が太陽の光に照らされると、腹の部分が浮き彫りになった。そしてそこには――

「なんやと！」

青白い人間の顔が甲羅のように並んでいるではないか。そのひとつひとつがまるで生きているように声を発していた。その姿はおぞましく、そしてあまりにも哀しい。スパチャホフは隣の檻で発狂しそうなほど怯えている囚人に聞いた。

「おい、ありや何や！ 何で人間の顔が張りついとんねん。ゲノつて何や？」

その質問に答えるところではない。その囚人は小便を漏らしながら壁際で腰を抜かしていた。諦めたスパチャホフが視線を戻すと、その影が近づいてくる。口が開かれると、真っ赤な口内は血で満たされ、ぎつしり並んだ長い牙が赤い糸を引いた。

「やる気か？ 言っとくけどな、こっちや昨日からエライ鬱憤が溜まってんねん。手加減でけへんから……」

スパチャホフ自ら檻の扉を開けると、ずいとゲノの前に仁王立ちした。

「……念仏でも唱えとけや」

その姿を見た隣の囚人は正気を取り戻し、慌てて口を差し挟んだ。

「あんた正気か？」

「おう」

「やる気なのか？」

「黙って見とれや」

「その格好で？」

「やかましいわ！　今エエところやねん、やっと見せ場やねんぞ！」

第7記

テトラたちが街中を走り抜けてゆく。

広い都市の中ではわずかな数のゲノを捜すのは容易ではないと思われたが、先々で湧き起こる絶叫と殺戮の痕跡が進むべき道を教えてくれた。

その道すがら、まだ未知に近い街並みに、見掛けた記憶がある建物が増えてきたのに気付く。

「マーク、こっちは確か……」

「宿の方向だな」

だとすれば、宿の親父がゲノを見つけて逆上する可能性がある。

（いや、さすがにそれはないかな）

あの異形の怪物を見て、幾多の修羅場をくぐり抜けてきたテトラでさえ一瞬足がすくんだ。

普通の人間では、その恐怖から逃れることしか考えないだろう。

（それにしても……）

テトラの頭に小さな疑問がよぎる。

奴らは人を食うために襲うのではないのだろうか？

だとすれば門の近くを襲撃してさらった人間をゆつくり食せば良い。現に最初に見たゲノはゆつくり喰らおうとしていたようにみえた。

（わざわざこんな街中に入り込むか？）

危険を冒してまでそんな行動をとることがいぶかしいのだ。

そんなことを考えながら、全速力で走るテトラの頭上をひとつの影がよぎった。

最初は鳥かと思えたそれは、不規則に屋根から屋根へと飛び移り、一行の向かう先へゆゆうと追い越してゆく。

そしてそれは、ひとつだけのものではなかった。

「なんだありゃ！」

つい先ほど見た異形の怪物。それはゲノに間違いはないが、少し違うのは胸に革鎧を付け、手にはそれぞれ槍をたずさえている。

門衛から奪ったものではなさそうだ。

それらの武装したゲノの数は五十匹は数えるだろうか、日差しがさえぎられ、曇り空のようにあたりが暗くなった。

「おそらくは、あれがゲノ兵というものではないのか？」

おどろおどろしい空を見上げてマークは険しい表情をみせた。

「どこに行く気だ」

無差別な殺戮ではない。はぐれゲノだけでなく、ゲノ兵まで出てきたとなれば、攻撃目標があるはずだ。

その影が次々と建物の屋根から降りたった。

先々に転々としていた悲鳴がやがて近づいてくる。

（この先は……）

そう思った矢先に、悲鳴をかきわけて勇ましい声が角の先から聞こえてきた。

「てめえら、息子だけじゃなく俺の店までどうにかしようってのか
」！

（宿の親父だ！）

だとすれば奴らの目的は親父か。

（違うな）

確信を持ってテトラたちは角を曲がった。

思わず目を剥く光景。怪物が群れをなして宿を取り囲んでいる。小さな窓からは、逆ギレした親父の紅潮した顔が見えた。

とても常人が踏み込めるような領域だとは思われない。が、三人はすばやく得物を構えると、辺りを素早く見渡し、後ろを壁にして小さな陣を作った。

「あいつらの狙いは、たぶん俺たちだ」

「としか考えようがないな」

「うまそうには見えないなりよ」

「んなことじゃねえよ。まあ、考えるのはあとだ」

どういう理由かは分からない。それを考える状況でもない。ただ、目の前の怪物を切り裂く理由もないが、逃げる理由もない。

あるとすれば、人間として見過ごせない義侠の心だろう。

それに従って、テトラは声を上げた。

「おい、こっちじゃねえのか？」

いまにもドアを破り、壁ごと打ち壊そうと構えていた異形の集団の注意が一斉にこちらへ突き刺さる。

「あんまりゾツとしないなりよ」

そっいうチェリーだったが、口調には余裕がある。

（いつもこうだな、コイツは）

真ん中に立って構えるテトラは、右で太い金属製の棍棒でゆっくり肩に叩くチェリーをちらりと見やった。

棍棒は重さにして五十キロはある。

その怪力から繰り出される攻撃のすさまじさは、見かけからは想像できない。

普段の軽率なデブは、戦場では頼りになるデブに変わる。それは常に戦陣を率いてきたテトラが一番良く知っていた。

「怪物退治の始まりだな」

渴いた唇を舐めると、前方の黒い集団は破裂したように個々に飛びかかってきた。

死を覚悟していた宿の親父は、取り囲んでいるゲノの注意がそれたことに半分胸をなで、半分いぶかしんだ。

そのおどろおどろしい壁が一斉に崩れると、一瞬視界に三人の男たちを捉えた。

（海賊か……）

しかしその勇姿はあっという間に黒い固まりに押しつぶされた。

（無茶だ！）

そう思った刹那、血しぶきを上げながら宙を舞い、弾きとばされる

ように地を転げたのはゲノのほうだった。

研ぎ澄ました一斉の攻撃を押し返されたゲノらに動揺が走ったのか、一瞬殺気に恐怖が混じる。

その呼吸を歴戦の戦士らが見逃すはずはない。今度は地を蹴って烈しく撃ち込んだ。

テトラの剣はしなやかで軌道が円く、その切っ先は不規則に舞う。だが急所を違うことはない。無骨に襲いかかるゲノをするりとすり抜けるたびに、後ろで巨体が地に崩れてゆく。

マークの戟は、その刃先を目で追えなかった。

まさに瞬間、目の前に立ちはだかる怪物は縦に横に、体を二つに裂いて地面を転がった。

チェリー繰り出す棍棒が空気を唸らせている。その破壊力はゲノの頭を易々と肉片に変え、突き出される槍を叩き折ってゆく。

当然、横殴りにされたゲノは、骨をむき出してボロクズのように路地の壁に張り付いた。

その凄まじい光景を目にした宿の親父は、身震いして驚愕した。

（す………すげえ）

個々の武技において、こんなものは見たことがない。

逃げまどっていた人々までもが足を止め、その想像をはるかに超え

た快心事を呆然と眺めている。

いったん崩れを見せた集団は、次第に戦意を削られ始めた。

飛び込んでゆくゲノの足に躊躇が見られる。

（こんな化け物でも恐怖は知ってるようだな）

戸惑いは虚を生み出す。その虚をつけば、たやすく相手を死地に追いやることが出来る。

個の闘いでも衆の闘いでも、それは変わらない。

それを体得しているテトラたちの周りには、すぐさま足の踏み場がなくなるほど醜悪な死体で満たされた。

その死体から次々と光がとき放たれ、あたりは荘厳さと壮絶さが同居する奇妙な光景が出現した。

『光の中の戦士たち』

遠巻きに見ていた人々は、一様にそんな感慨に包まれていた。

やがて、あとじさりを始めた集団は踏みとどまるのを諦め、どつと逆を向いて逃げ始めた。

「おい、終わりか？」

まだ半数は残っているとはいえ、退きどころはわきまえていると見える。

ゲノ兵の集団はわき目もふらず、壁から屋根へと駆け上り、屋根から屋根へと来た道順をたどりはじめた。

個々に暴れていたはぐれゲノらも、それを目にすると慌ててあとを追う。

「はぐれ集団は陽動か？」

次々と引き上げてゆくゲノらを見ながら、テトラはそうつぶやいた。マークにも同じような考えがあったのだろう。自分の考えを口にした。

「おそらくは、警備の兵を分散させるためか、あるいは……」

「あるいは？」

「命令が厳格に伝わらなかったか……ではないか？」

「それもあるか」

生来はぐれゲノというのが、命令系統から外れて野に下ったゲノ兵だとすれば、再度命令を下したものの、やはり上手く使えなかったということも考えられる。

「どっちでも良いけどな」

そう。それより本題は、なぜ自分たちが狙われたのか、だ。

もちろん、その謎がこの時点で解るはずもなく、その思考は周りから湧き起こった拍手と喝采にかき消された。

「お、お。なんだこりゃ」

いつの間にか周りに人垣が出来ている。

「すげえよ、あんたら！」

「ありがとう！」

「こんなスツキリしたのは生まれて初めてだ」

喝采と賛辞のなか、マークはわずらわしいと言わんばかりに宿へと足を向けたが、テトラとチェリーは笑顔で会釈をして観衆をわかせていた。

そんな中、ひとりの男が遠くから叫びながら駆け寄ってくる。

声を静めた観衆の注目が集まるなか、その男は狂喜しながらこう言った。

「おーい、あの51番をひとりで素手で倒した男がいるぞー！」

一斉にどよめきが起こる。

真っ先にその男のもとへ駆け寄ったのは宿の親父だった。

「本当か？」

食ってかかるような形相に気圧された男だったが、

「ああ、北町の兵庁の前でえらい騒ぎになってるよ」

それを聞くと、親父は歓喜を遠吠えに似た叫びに乘せながら走り去っていった。

「あらら、稼ぎをとられたみたいなりね」

「みたいだな。しかし、素手であのデカイ奴を倒したって……まさか」

「アイツは檻の中なり」

「だよな」

そんなやつが他にも居るもんだと少し驚いたが、とりあえず血まみれた服を洗濯しようかと、宿へと入ったテトラとチェリーだった。

一方、こちらはその51番のゲノを倒した現場。先のテトラたちがゲノ兵らを打ち倒した場所とは違い、一種異様な雰囲気包まれていた。

兵庁の壁を打ち壊して中へ侵入したゲノは、間もなく自ら開けた穴から這うように逃げ出した。

しかし続いて飛び出してきた男が、路上でそのゲノを捕らえると、素手で打ちのめして殺したというのだ。

実際に目の当たりにしなければ信じられない出来事だと、集まった

人々は口端にのぼらせたが、

「それより信じられないのは……」

「あの格好だな」

喜び勇んで現場へ駆けつけた観衆は、いちように苦味を口に含ませた。

巨大なゲノは、まぎれもなく51番だ。だが、それを倒した男がこんな変態では素直に喜びようがない。

「どんな勇者さまが倒したのか見に行きましょうよ！」

きらきらしい期待を持って現場へ駆けつけた若い娘たちの黄色い歓声は絶叫にかわり

「この日をどんなに待ち望んだか」

涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにして駆けつけた宿の親父は絶句した。

（なんでスケスケ全身タイツ！）

怪物を倒して感謝されるかと思っていたのは、言うまでもなくスパチャホフ以外ありえない。

しかし投げかけられる視線がいちように冷たいことにいたたまれなくなり、

（とりあえず檻に戻るか……）

と、観衆に背を向けた。彼なりに気落ちするところがあったようだ。警備兵らも対応に苦慮するしかない。

手をこまねいていた51番の退治を見事にやってのけた勇者として扱えば良いのか、それとも単なる強い変態として扱えば良いのか。

いずれにしても本人が檻に戻りたいと言ったので、とりあえず陽光が射し込むようになった檻に戻ってもらうことにした。

（なんで端折ってんねん）

スパチャホフからすれば、自分の輝かしい闘いのシーンが描かれなかったことが一番の不満のようだ。

すまん。と、一言述べておく。

第8記

その夜は、ゲノ襲来の犠牲になった人々を悼む一方で、勇者の誕生を祝う宴で街中の灯りはいつにも増して明るく、そして賑やかだった。

宿の主人は大盤振る舞いで料理に腕を奮い、客に大声でテトラたちの武勇伝を誇り、笑っては泣くことを繰り返した。

開店以来の大盛況となった客の目的はもちろん、三人をひと目見ようと詰めかけた者たちだ。

「テトラさまー！」

街の娘らが声を揃えて、外から黄色い華やぎを添えると、負けじとマークの名を呼ぶのは、やや富裕層と見られる令女たち。

「おー、さすがに勇者さまはモテますなあ」

店内に入り込めた客らは、半分うらやましげに目を細めている。

「迷惑であるな」

声があがるたびに不快な色を隠さないマークは、苦みばしった口調でそっけない。

「贅沢な悩みなり……」

美味しい酒を前にしても、なかなかいつもの気炎があがらないチェリ

「は、物憂げに外に目を向けた。

そこにはいかにも無骨でむさ苦しい集団が、腕を組んでこちらを睨んでいる。

女たちが声援をあげるのを迷惑そうに眉間を寄せて見やると、こちらにも負けじと地響くような声で吼えた。

「チェリー殿おー！」

これにはその場の全員が失笑をもらした。

「あいつら、何なりよー」

招かれざる客とはこのことだ。

そんな落ち込むチェリーに、客のひとりが酔眼を向けて話しかけてきた。

「あいつらはここいらで幅を利かせてるならず者たちでしてね。みんな迷惑してんですよ。でもチェリーさまがいてくだされば大人しくなるうてもんです」

「全然嬉しくないなりよ」

喧騒のなかで忘れていたが、テトラは聞いておきたいことを思い出して、宿の親父に尋ねた。

「そういや、51番倒した奴って、どんな奴だったんだ。親父、見

に行っただろ？」

料理をカウンターに並べる手を止めた親父は、

「いや、それが……」

と言ったあと、ため息をまじえながら眉をひそめた。

「おお、あの変態野郎だろ」

別の客から声があがった。

「変態？」

と聞き返したものの、三人には心当たりがありすぎる。

その噂を聞きつけた口さがない客らは、その模様をさも見てきたような口ぶりで語り出した。

「ストリップしながら倒したらしい」

「女物のパンツを頭からかぶってたらしいぞ」

「そいつの屁が臭いのなんの」

噂が噂を呼び、出来上がった人物像は果てしなく下劣な人間ということでおさまった。

三人は腹をかかえて笑いながら、それでも何故か嬉しげな顔を見せた。

「でもまあ、感謝はしないとな……」

最後にしんみりと語った親父は、やはり感謝の念が勝るのだろう。

そう言うと、誰しもが口をつぐむしかなかった。

しびれを切らした店外の見物人らは、ついに三人を外に引きずり出した。

歓声と賛辞はいつまでも鳴りやまず、通りはパレードの賑わいを夜半まで鎮めることはない。

「持ち上げられると後が怖いな」

テトラは人々に軽い愛嬌を振りまきながら、かたわらのマークにそう言った。

「まさしく」

この男は、常に足元を見誤らない。

浮かれた熱気の中でも、泰然とした姿を崩すことはなかった。

そんな賑わいの熱気が、かすかに壊れた壁から入り込んでくる。しかしその熱気も、冷たい石床を温めるほどではなかった。ここはスパチャホフが佇む牢獄の中だ。

「なんや、賑やかやなあ……」

射し込んでくる月明かりが、わびしさを浮き立たせた。

目の前には、先ほど食べた豆のスープの空き皿が放置されている。

（あいつら、どないしてんやろ？）

思い出すと、怒りがこみ上げてきた。

（そうや、あいつら許さへんで！）

落ち込んだ心が、怒りで奮い立つ。思い立ったらこんなところでじっとしているわけにはいかなかった。

「おい、看守！」

入り口で腰を据えていた看守は、思いがけなく軽く腰を上げ、

「はい、何でしょう？」

と、走り寄ってきた。

予想外の反応に戸惑ったのはスパチャホフのほうだった。

「いや、あの……なんだ」

「上からは仰せの通りにせよと言われております。何なりと」

「マジかいや、早よ言えや！」

「申しわけございません」

丁寧な対応を示す看守に、まずは檻から出すよう要求すると、あっさりと扉が開いた。

苦笑しながら牢を出たスパチャホフは、外へ出ても良いかと言ったが、さすがにそれは困ると、看守は困惑した様子を見せた。

（何でもちゃうんかい）

罪は罪と言うことなのだろうか。それを問うたが、

「それは明朝に決定されると思いますが、おそらく赦免されると聞いております。明朝、政庁からの使者が来るまで留めおかれるようにとの命令にございますれば」

スパチャホフの顔に明るさが差した。

「ほな、暖かい部屋と美味しい飯を用意してもらおか」

「は、では貴賓室にさっそく暖をおとりいたします」

「酒もな」

「さっそくに」

「コンパニオンも頼むわ」

さすがに看守は眉をひそめたが、承諾した。

聞き終えた看守は、まずは応接間に案内し、そこで待つよう伝えると、部屋をあとにしようとした。

「あ、大事なもん頼むの忘れてたわ」

「は、何なりと」

「服を頼むわ」

「いやあ、それはちよつと……」

「なんでやねん！」

とにかくも、スパチャホフにも、ようやく幸運の女神が微笑みかけてきたと言わねばならない。

翌朝、政庁からの使者が訪れたのは、もちろんスパチャホフだけではない。

「州師からの使者である。主人はおられるか？」

朝から、と言ってもかなり日は高くなっている。物々しく飾り立てた馬車を曳いた一行が、およそ似つかわしくない場所にいた。

無論、それは宿屋シャカールの前である。

（なんだよ、朝からうるせえなあ）

やけにハキハキとした口上が二日酔いの頭に突き刺さる。毛布を頭から被ったテトラは、階下の騒乱から逃れるように丸くなった。

だが、その毛布はすぐに引きはがされた。

毛布を丸めながら、チェリーが見下ろしている。

「なんだよお前、まだ寝かせろよ」

腫れたまぶたをしばたたせながら、テトラは毛布を取り返そうと手をのばした。

が、それをかわしたチェリーは、珍しく重い口調をみせた。

「なんか、お偉いさんに呼ばれてるみたいなり」

「なんだそりゃ」

「褒美かもしれないなりよ」

そう聞くと、テトラはベッドをはね起きた。

その豪華な馬車は、街の北へ北へと進んでゆく。

州師と言えば、州で一番偉い人間だろう。直接に拝謁するのだろうか？

などと考えながら街並みを見渡していると、やがて道は広くなり、

あたりはさながら王宮街という様を見せ始めた。

堀を巡らされた大きな屋敷らは、高官の貴族たちのものだろう。

中央を走る大路の先にひとときわ高い城が見える。

やはり高い城壁に囲まれ、さながら城塞のなかにまた城塞があるといった風情だ。

「ずいぶんと堅いな」

堅いと言うのは、堅牢という意味である。

この都市全体が、かなり防備に力を入れているのがわかる。

「意外と荒れてんじゃねえの？」

もちろん、国が、という意味だ。

「では、存外我らを招く意図も、恩賜だけでは済まぬかもな」

マークに明るさが見られない。

「なるほど」

それなりの心構えをしておいたほうが良さそうだと、テトラは浮かれそうな心を引き締めて、城壁をくり貫いた巨大な城門を潜った。

馬車を降り立つた一行が案内されたのは、豪華絢爛な賓客の間だった。

何百という燭を灯されたシャンデリアに目が回るような気後れを感じながら、これまた座るのもはばかれるような、豪華な席を勧められた。

案内した使者は、慇懃に頭を下げると

「州師であられるクララ姫より、直々の恩賜がございますれば、しばしお待ちくださいませ」

とだけ言って、部屋を去った。

取り残された三人は、さっそく額を突き合わせての打ち合わせを始めた。

「恩賜で、楽しみなりね」

「馬鹿言つな。その代わりって話が出てくるかしんねえぞ」

「代わり？」

「つまり、仕えろって話だよ」

「それは困るなり」

確かに迷惑な話だ。彼らには海賊という稼業が最優先であり、その海賊というのも表向きだ。

いま現在、ターントウを支配しているのは、ゴーキ帝国という。

海賊エムターンはその圧政を覆そうとする反勢力の筆頭でもあるのだった。したがって、彼らなりの信念を持っている。ここで投げ出すわけにはいかない。

マークは武人のような分別臭い意見だった。

「客将という身分なら良いかもしれぬ」

「それが通るならだが……」

「が？」

「いずれにせよ、ゲノハンターとどちらが稼げるかを天秤にかけるしかねえだろ」

利益にさといテトラの意見は、マークにはやや受け入れがたい。

（だが、もつともであるか）

最優先にすべきことを中心に据えて考えれば、おのずとそうなる。

そして意見の一致を見た。

「とにかく、高く売りつけることになるかも知れねえ。行儀だけに気をつけるよ」

勇猛だけを誇る人間では、安く買いたたかれる可能性が高い。下手をすれば傭兵扱いだ。

「謁見の間へご案内いたします」

やがて再び使者が顔を見せると、赤いカーペットが長々と敷かれた
広間へと通される。

衛兵らがずらりと並び、奥の高みの席に端座する女性が見えた。

（まだ若いな）

緊張した雰囲気の中에서도、そういうところは、見逃さないテトラ
だ。

「ここでお止まりください」

使者に促されて、その場に膝をつく。

儀礼に則り頭を垂れる三人の後ろで、そのとき声があがった。

「お前ら、こんなところにおったんかい！」

厳肅さを打ち破る怒声には聞き覚えがある。

（なんだとお！）

思わず振り返ったテトラの前に、拳を振り上げて飛びかってくる
スパチャホフの姿があった。

（ぶち壊しだ）

絶望の予感が走るなか、その拳をさけて言葉を放つテトラも役者顔負けだった。

「ど、どなたか知りませんが無礼ではないですかな」

「何やとコラ、とぼけんのもたいがいにせえ！」

「いや、私は知りません。あなたなど知りませんぞ！」

組み合う二人を啞然と眺めていた衛兵らだったが、姫の傍らに控える老いた武人が発した一言で、一斉に四人を槍先で取り囲んだ。

顔を真つ赤に怒らせた武人が階下に降り立つと、剣を抜いて立ちはだかる。

「貴様ら、この場をどこと心得る！」

「何やジジイ。お前らが呼んだんちゃうんかい？」

スパチャホフは礼儀から最も遠い人間であり、つけ加えるなら阿呆である。

槍を押しつけるようにしてすつくと立ち上がった。

「き、貴様。その格好は何事ぞ！」

その声と同時に、武人の背後から悲鳴があがった。

もちろん、姫が発したものだ。

「おのれ、姫に醜悪なるものを。そこになおれ、ド頭がち割つてくれる！」

降りあげられた剣を見ても、スパチャホフはたじろぎも見せない。

「やってみろや」

「ふんっ！」

間髪入れず降り下ろされる剣撃――

「真剣白刃取り！」

劣らぬ速さでスパチャホフの両手が頭上で合わさった。

静まり返る衛兵たちに、驚愕の表情が浮かぶ。

余裕を見せたのはスパチャホフだった。

「ふふふ」

「な、なんと……」

不敵な笑いを浮かべるその異様に、歴然の老将がたじろいだ。

いちおうはテトラがつっこんでみる。

「いやいや、入ってる入ってる」

「完全にタイミングが遅れてるなり」

剣先は深々と額に刺さっていた。

「なぜ死なん。ふん！ふん！ふん！」

「真剣白刃取り！真剣白刃取り！真剣白刃取り！」

「いやいや、だから全部入ってるってば……」

第9記

老将とスパチャホフのやり取りを眺めていた衛兵のひとりが、ふと吐いた言葉で騒乱がぴたりと止まった。

「そのほづらがこの男を見知らぬはずは無いのでは？」

当然だと言わんばかりにふてぶてしい顔のスパチャホフとは対照的に、テトラは

（何故ばれたのか？）

という表情のあとに目を泳がせた。

「先日このスパチャホフを捕らえたのは、そのほづらであったはずだが」

偶然あの現場にこの衛兵は居たのだらう。

（もはやこれまで）

これ以上シラを切るのも無理がある。居直ったテトラは覚悟を決めた。

しかし、

「もうよい」

涼しげな声が頭越しにかけられると、一同はさつと争気をおさめた。

仰ぎ見ると、クララ姫と呼ばれる神々しいまでの美しさを備えた州師がいる。

その口からは、温情の言葉が伝えられた。

「もうよいのです。すべて不問といたします」

「いや、しかし姫……」

「カーツ將軍」

不服を示した老將を、クララ姫はやりわりとたしなめた。

「……御意」

スパチャホフを一瞥したカーツ將軍は、唾を吐きたい欲望を抑えながら、再び壇上へとあがった。

その声は老将だけでなく、スパチャホフの心をも鎮めてみせた。

心ここにあらずといった風体で、クララ姫を仰ぎ見ている。もちろんそれは半分は出血による意識の喪失も含まれているだろう。

噴水のような出血を頭から浴びながら立っていた。

「婦女子をそのように見るのは失礼ではありませんか？」

じつと視線を投げかけられたクララ姫は、しかし不快さはおくびにも出さずに微笑んでみせた。

「あ……こらエラいすんまへん！」

慌てて膝を折ったスパチャホフは頭を下げた。礼儀を意識したものではない。

姫が自然と備えた威と、かもしだす高貴さにうたれたのだった。

（なるほど、なかなかのもんだ）

普段から頭を下げることを知らない、いわば猛獣のような男を屈伏させるなど、そんじょそこらの王様だろうが出来ることではない。

（姫と言っからには王族か）

つまりは偽物ではないということだ。

それに加えてどうやら情け深いところもあるらしい。それはいまのやり取りだけでも十分にわかるものだった。

テトラはこの姫を気に入った。他の三人はどうだろうかとわずかに顔を横に向けると、その表情はまんざらでもなさそうだ。

「まずは礼を申さねばなりません。昨日は大挙したグロースタークのゲノ兵を撃退していただいたと聞きました」

四人は恐縮するようにさらに頭を下げる。

「こちらの警備の不備をおぎなっていたいただき、感謝いたします」

「とんでもございません。当然のことをしたまでです」

テトラは謙遜してその言葉をしりぞけて見せたが、それはいわゆる常套文句である。

「頭をあげられよ。そなたらの顔を見て話をしたく存じます」

そう言われて頭をあげた四人は、改めてクララ姫と対峙した。

もちろん、姫の脇には側近とも呼べる高官らがずらりと並んでいる。しかし、姫を除くその者たちの視線は、いちように冷たい侮蔑が含まれていた。

その中のひとりが、真意を確かめたかったのだらう。

「そのほうら、三人だけであれだけのゲノを倒したそうだな。また、スパチャホフとやらは、なんと素手であの51番ゲノを倒したとか。真の話であらうか？」

グロースタークの侵攻に悩む国の人間にとって、驚異的な戦闘力を誇るゲノ兵は恐怖の対象となっている。

噂だけを聞けば、空前絶後の快事といえた。が、その真相は疑わしいと思われているようだ。

「間違いはありませんが、私どもの言葉を軽く見られていれば、その限りではありません」

うがった見かたをされているのにむっとしたのだらう。テトラはあえて強い言い方をした。

はつとしたクララ姫は、とりつくろうように口を挟んだ。

「コジーン卿、失礼ですよ」

そう言われると、その高官は頭を下げて一步退いた。

「申し訳ありませんでした。当方の無礼を許されよ」

（へりくだることも知ってるか）

そのクララ姫の態度には、女性ながらに大きな度量が見える。テトラはますますこの姫に好感を持った。

「お聞きしたいことはたくさんあります。それは今宵に晩餐会を開きますゆえ、ご出席くださいますでしょうか？」

そう言われて断る理由はない。

「喜んで」

と、答えた。

「では、褒美を差し上げたいが、何か望みのものは」

ここは忌憚無く答えておくか、と考えたテトラは、大きく出た。

「船、が望みです。とは言え、それはターントゥへの大海を渡れるほどのものにございますれば、過ぎた望みと心得ております。そこで――」

「なるほど、みなまで言わずとも分かりました。それでは相応の金ということでしょうか」

「ありがたく存じます」

ここでテトラは、ターントゥへ行く意志をさりげなく伝え、臣下としては召抱えられることをやんわりと断ったと言える。

かつ、巨額の金が必要であることも主張し、下賜される金も小額では足りないと言外に意図させた。

「では、スパチャホフ。そなたは」

「とにかく着るものを」

「おお、そうでありましたか。確かに不憫な……」

憐憫の表情を浮かべたクララ姫であったが、さすがにスパチャホフを直視するのは恥ずかしくて出来ないようだ。

側近に耳打ちすると、やがて金色に輝く見事な胸当てが運ばれてきた。

「これをさすけましょう」

「いや、あの。ピカピカでなくて良いんで、下のほうを……」

「王家の紋章入りで、胸のところには携帯が入るポケットまでついておる一品ですよ」

「だから、下の――」

「おお、これは最高の名誉！」

とどめを押し付けるように、カーツ將軍が唾しながら激賞する。

（ジジイはだまっとけや！）

「よかったな、スパチャホフ！」

「いやあ、見事な胸当てなり」

「武人としてこれ以上の名誉はあるまい」

結局ことわることが出来なかったスパチャホフは、泣く泣く上半身を黄金で包み、謁見の間をあとにした。

今夜まで城内でくつろいで欲しいということで、再び賓客の間に通された一行の前に、先ほどの老將軍が現れた。

「先ほどは失礼をした。改めて挨拶をいたす」

どうにも扱いにくそうな頑固者という印象だ。

「拙者はカーツ・ニクヤーノ虎狼卿將軍である」

「え、カーツ肉屋のコロッケ食中毒ってなんやねん？」

「虎狼卿將軍だ！」

「し……真劍白刃取り」

「入ってるってば」

さて、その將軍が一行の前に姿を現したのは他でもなかったようだ。

「ところで、そなたらの武勇を見込んでのことだが」

テトラたちは、やはり、と視線を合わせた。

「このハイペリオンに力を貸してくれぬだろうか。もちろん骨肉を捧げるとは言わぬ。ほかに大望を持っておられるようだ」

マークが意味深に目配せをすると、テトラも了承したように頷いた。

「まずはこの国のことを教えていただきたい。腹を割って話せば、先の船の話に繋がりますが、我々はターントウへ行くのではありません。ターントウへ帰るのです」

「なんと、そなたらは」

「そうです。ターントウから来ました」

「そうであつたか。それで得心したわい。そのスパチャホフのような衣装も、向こうでは風俗としてのものなのだな」

「まあ、そんなところです」

「なんでやねん！」

テトラたちは、先のクララ姫のためならば、多少の苦勞を背負っても良いかと思つてはいるのだが、なにしろ情報がなさすぎる。

もし、明日にでもこの国が滅びるような事態が迫っているのであれば、この話に乗るのはいかにも危険だと考えていた。

「では、どこから話すか……」

しばらく考え込んでいたカーツ將軍は、やがておもむろに口を開いた。

第10記

ハイペリオン王国。それは千年もの昔、この大陸を統一した王朝が、大陸の名をそのまま国名とした千年王国である。

代々の王は魔力を備え、天より王気をさずかることにより、正当の王と認められた。

王気を授かるのは、ほとんどが先代王の血族であつたが、しばしば無関係の者も王気を備えることがあつた。

従つて世襲制ではなく、色んな氏姓がそのつど国を治めたという。

いま現在ハイペリオンは、二百年に渡りこの国を統べてきた一族、レイズア家が実権を握っているものの、15年前に先代王が崩御したあと、王気を授かったものは現れていない。

「じゃあ、いまは王様がいないってことか？」

そこまで聞くと、テトラは口をはさんだ。

「そうじゃ。通例で、次の王が立つまでは、先代王の嫡子が大宰相という官職に就き、国を運営しておるのだが……」

カーツ將軍は、口に苦さを浮かべてトーンを下げた。

「先代の長子、ユーパ・レイズア様が独断で仮王を宣言なされたのだ」

「仮王……つまり仮の王ってことか。なるほどそうか」

思い当たったようにテトラは手を打った。

「そうじゃ。察しのとおり、その宣言は民衆もそうじゃが、各州の州師にも強い反発をもたらした」

誰が次の王に選ばれるかは天のみぞ知っているわけだ。

ひとつ『仮』としたことは遠慮を見せたのだろうが、仮にとはいえ王を名乗るのは天への僭越と言える。

「最初に反旗をひるがえしたのは、レイズア家末弟アーマリン様が治めていたグロースターク州。それからエクリプス州、セクレタリアート州、ゴドルフィン州と、次々に独立を宣言し、公を自称して公国とした。そしてついに八州のうち王家側につくのは一州だけとなったしまったのじゃ」

（旗色悪いなあ。しかも内輪モメかよ）

テトラは崩さない表情の下で、半分この話を投げた。

「この州だけが仮王側ということですね」

「そうじゃ。このダーレー州と首州のバイアリー州だけじゃ」

「ずいぶん危ない話なりね」

危ない橋はなるべく渡りたくない日和見主義のチェリーは、その態度に反対の色を見せた。

マークも固く口を閉ざしている。

しかし、スパチャホフだけはその雰囲気をはらうように席を立った。

「俺はやるで。あの姫さん助けてやるんや！　そして――」

仁王立ちして握りこぶしをつくると、見るともなしに視線を虚空に向けて力説した。

と、その股間がみるみる膨らんでゆく。

「貴様、姫を助けてなにするつもりじゃ！」

「なにつて、人助けやるが」

「いや、おぬしの邪心が見える。見えるぞ！」

乱闘を始めた二人をよそに、三人はこそこそと密談をかわした。

「テトラ、この話は乗らないほうが良いなりよ」

「拙者もそう思うが」

「……そうだな」

ひとり煮え切らないテトラの姿をみて、マークは心のなかに小さな疑問を浮かべた。

（利にさとい男が珍しいこともあるのだな）

分かりきったことだ。

この話に乗れば負け戦を背負うことになる。それは自分たちの命の昇華の本懐ではない。

（それが――）

「まあ、いったん保留ってことにしねえか？」

と、曖昧に返事を濁した。

チェリーもその態度をいぶかしく思ったのだろう。マークに同意を求めるように視線を投げかけたが、マークは小さく頷いただけだった。

仕方がない、という意味だろう。

「カーツ將軍、返事は二、三日待っていただくことはできますか？」

剣を振り回していた手をとめたカーツ將軍は、それを聞いて剣をさやに収めた。

「もちろん結構じゃが――」

テトラの言葉には、否定的な色が濃いと考えたカーツ將軍は顔を曇らせたが

「前向きに考えておきます」

と、テトラが付け加えたことに、一転喜色をあらわした。

それを聞いてチェリーは腰を浮かしかけた。眉を寄せテトラに無言の抗議をしたが、それには一瞥もかえってこない。

「おお、それでは楽しみにしておる」

カーツ將軍はほがらかに賓客の間をあとにした。出て行ったあと、珍しくチェリーは怒気を含んだ口調を見せた。

「僕はいやなりよ。こんなとこで命を無駄にしたくないなり」

「なんやこら、天下のエムターン切り込み隊がビビっとんかい」

「スパチャホフは何も知らないから、そんなこと言うなりよ。あの化け物、何匹くらいいるか知ってるなりか？」

「何匹って……」

宿の親父から聞いた話では確か――

「三万匹以上の軍団なりよ」

「三万……」

さすがにスパチャホフの顔色が変わった。

マークもあまり乗り気とは言えないのだろう。

「ここはよくよく考えねばならん。そのゲノ軍団に加えて他に五州

も相手にせねばならぬとなると、極めて負けの色が濃いな」

と、悲観的な現状を強調した。

「そんなもん、俺らエムターンは――」

それでも引き下がろうとしないスパチャホフの口を閉ざすように、マークは言葉をかぶせる。

「我らは義のために闘っておる。だが、この戦に義は見えぬ」

その言葉は重い。さすがにスパチャホフも押し黙ってしまった。

その夜の晩餐会は、想像していたよりもこじんまりとしたものだったが、さすがに料理や酒は豪勢である。

チェリーとスパチャホフは我先にとそれらにかじりついた。

出席しているのはもちろん貴族ばかりだが、意外と将兵が多い。ゲノ退治の英雄が出席するとあって、こぞって出席を願いだしたものたちばかりだった。

文官はやや斜めに彼らを見ているようだ。それほどの出席者が見られない。

しばらくは昨日の武勇伝を何度も聞かれ、料理にも手をつけられないありさまだったが、ようやく周囲がおちついた頃、テトラは主席

が空いていることに気づいた。

（姫さんはどこかに行ったのかな？）

と、やや気落ちしたところに、思いがけなく背後から声がかかった。

「テトラ殿、楽しんでおられますか？」

「ええ、おかげさまで——」

と、振り向いたその身のけぞった。

（姫、こんな気安く……）

驚いたのはテトラだけではない。周囲から、とくにカーツ將軍がすばやく駆け寄り、苦言を呈した。

「あまりくだけすぎますと、声をかけられたほうも恐縮がすぎますよう」

「あら、いまは聴許の場ではありません。少しくらい羽を伸ばさせてくれませんか？」

確かに見たところ、まだ二十歳を少し過ぎたくらいの年齢だ。本来なら街に出て、同年代の友人らと遊びまわっていることだろう。

（確かに窮屈だよな。宮殿ってのは）

割って入ったカーツ將軍に不満の色をあらわすクララ姫を見て、同情の念がわく。

カーツ將軍としては、気安いかどうか以前に、この客がまだ味方についていないことに信用を置いていなかった。万が一、姫に危害を加えないとも限らない。

まだ腹を探り終えてないというのが正直なところだ。

実際、これから交誼を深めてから、テトラたちをどのように使うかを思案しようと思っていた。

「テトラ殿、踊りませんか？」

カーツ將軍を無視して、そう言った言葉に周囲から驚嘆の声があがった。

「クララさまから殿方を誘うとはお珍しい」

「いや、私も初めて見ますな」

「クララさまにもこのような遊び心があるとは」

「良いではないですか、私は好ましく思いますぞ。次回から大手を振って誘えますからな」

渋面をしたカーツ將軍とは対照的に、このダンスは好意的に受け入れられそうだ。

舞台の中央にいざなわれたテトラは、臆することなくクララ姫に頭を下げて礼を見せた。

楽隊の指揮者が、絶妙なタイミングで演奏を始めると、周囲のため息とともに二人の影が円を描いて踊り始める。

「あの野郎、なに他人の女横取りしとんねん」

おおぶりの肉をかじりながら、スパチャホフだけが不機嫌だった。

「なあ、マーク――」

かたわらのマークに同意を求めようとしたとき、そのマークの袖を引く者がいた。

「あの、よろしければお相手願えませんか？」

見ると、どこかの貴族の令嬢だろう。美しい娘が頬を赤らめてそばに来ていた。

「ああ、そいつはホモやねん。無理無理、姉ちゃんあきらめるんな」

カチンときた怒りを卑下た笑いに包んで、スパチャホフはゲラゲラと笑ったが

「お相手いたそう」

と、意外なことにマークはその誘いに乗った。

（ウソやろ……）

ほおばった肉が口元からこぼれた。女性と踊るマークなど、想像すらしたことがない。

「おいおい、あれ……」

信じられるか、といった表情でチェリーの肩を叩くと、そのチェリー
のそばにも貴族の女性がいた。

（んなアホな！）

テトラとマークだけでなく、チェリーにまで声がかかるとなると、
心中は穏やかではない。

「コイツはな、アル中やし屁は臭いし、ウンコしたあと拭かへんね
んで！」

なんとかその状況をぶち壊したいスパチャホフをよそに、チェリー
は幸福の絶頂という顔で舞台の中央へと進み出た。

「悪夢や……悪夢やで」

地団太を踏むスパチャホフを残し、舞台は多くの踊り子で、華やか
な賑わいを見せている。

（悔しなんかないわ。俺はいまメシを食いたいんや。そやから踊ら
んだけや！）

「ふうふうー！ うめえ」

あえて食べるのに夢中で、踊りなどには興味ないというスタイルを
とりつくるうしかない。

「涙が出るほどうまいわ！」

両眼からとめどなく涙を流しながら、スパチャホフはひたすら食べていた。

「なぜ私を踊りに？」

と、テトラは聞かなかった。

おそらくはカーツ將軍から申し込まれた話と繋がっているのだろうと予想はしているが、それをこの場で問うのは無粋というものだろう。

しかし、その胸中を読んだかのように、クララ姫は言った。

「あの、誤解なさらないくださいね」

「誤解、ですか？」

「カーツからの話とは関係ありません」

そう言つて裏のない笑顔を見せる。

テトラは慌ててその邪推を否定し、自分の栄誉と喜びを素直に言葉にした。

「いいですよ、そう思われても仕方ありません」

「そのようなことは決して」

困ったような表情を覗き見るように、クララ姫の顔が近づき、そして

「好ましく思いました」

と、確かにそう言った。

海千山千、幾多の色香を味わっては捨ててきたテトラでも、さすがに胸を熱くするのを抑えられないだろう。

（いや、しかし――）

そうなるだろうと自分でも思っていたのだが

「私も、姫をそのように思います……が、なんと言いますか」

「ですね、私もうまくは言えません」

熱くなるというより、温かい感情が胸を満たした。

（なんとというか……）

テトラはその感情を表現する言葉を探してみた。

（放つとけない、か）

その言葉を拾い上げたとき、おもわず胸のうちに手をうつた。

それからの姫は気安さを見せ、謁見の場とは違う明るさを見せた。とりとめのない話ばかりであるが、テトラにとっては好ましい。

しかし、次に問われたことについては、おもわず冷や汗がにじむのを抑えることが出来なかった。

「海賊をやつてらっしゃるとか」

街で情報を収集することを忘れるほど、無用心ではないようだ。

「海賊とは言いましても……その……我らは不義不仁の行いをして
いるつもりはございません」

「でしょうね。私もそう思いましたから、こうしてテトラ殿と踊つております」

言い訳ではないが、自分の信念をテトラはこぼした。

「賊というのは、権力に反するものを言います。その権力がたとえば悪であつてもです」

「ゴーキ帝国ですね」

思わぬ名前がクララ姫の口から飛び出すと、テトラのステップを踏む足が止まった。

「グロースタークの後ろ盾となり、この大陸への進出を狙っております」

（なんだと）

テトラは険しい表情で、詳しく話を聞きたいと詰め寄った。

「はい。でもせっかくだからですから、曲の最後までお付き合いくださいませんか？」

とがった心をなだめるように、クララ姫は悠々とテトラの手をとる。

（俺としたことが……）

場の雰囲気にもで気が回らなかった自分に苦笑しながら、ふたたび軽やかにステップを踏んだ。

第11記

一夜明けた宮殿。テトラら四人は再びカーツ將軍に謁見すると、客将としてこの国にとどまることを告げた。

ことのほか喜んだカーツ將軍は、すぐにクララ姫に謁見すると、その旨を復命した。

「いったん宿へ戻ります。主人に礼を言わねばなりません」

四人は与えられた馬に乗ると、さっそうと下町の宿に降り立った。

「見違えたな。いや、びつくりしたよ」

宿の主人は顔をほころばせて四人を迎えたが、そのなかにスパチャホフを見つけると、その手を力強く握り締めた。

「お、おい……俺にその気はないで」

わけが分からず困惑するスパチャホフだったが、チェリーから事情を聞くと、なっとくしたように笑った。

「まあ、人としてやな、当然のことをしたまでや、なあ」

少しでも持ち上げられるとすぐに舞い上がるのは、この男の知能を物語っている。

そんなスパチャホフにでも、宿の主人はそれこそ最大の感謝をあらわした。

「ちょうど息子の嫁さんが孫を連れてきててな、紹介するよ」

ごちそうをテーブルに並べると、宿の主人は二階へ声を掛けた。

「ココ、フラン、ちょっと降りてきなさい」

透き通った声が返ってくると、やがてその女性は後ろに少女を連れて階段を降りてきた。

「お義父さまから聞きました。このたびは夫の仇を討って——」

そこまで言ったココが叫び声をあげると、スパチャホフが奇声をあげるのは同時だった。

「お、お前。あんときの女や！」

「変態！ 追ってきたんだわ」

わけが分からず主人は両者を見比べ、とりあえずその場をおさめようとした。

「ココ、この人が仇を討ってくれたんだぞ」

「そんな……」

信じられないという目でスパチャホフを改めてみたが、その視線が下へ降りると、目をそらして後ろを向いた。

「お母様……あの下半身を露出している男が、お父様の仇を討って

くれた人？」

「そのようです。あんな下半身を露出していても、感謝しないといけないんですよ」

「そうね、お母様。いくら下半身を露出していても仇を討ってくれたんですもの」

「フラン、露出した下半身を見ないようにしてお礼を――」

「もうエエわ！」

ひと波乱あった出会いだったが、ココとフランは席を同じくしてささやかな祝宴をあげた。

その宴も終わる頃、酔眼を急に鋭くした主人がテトラに言った。

「海賊さんよ、本当に激闘が続くと思うけどな。ここにいるココやフランが笑って住める国を守ってくれ」

来たばかりに見た街は、富み、栄え、人々は幸福を謳歌しているとテトラは見ていた。しかし、その笑顔の裏には、国の将来を憂う別の顔があることを知った。

客将というのは、国家直属の将ではない。したがって、四人を養う後見人はカーツ將軍ということになった。

カーツ將軍の私邸で部屋を与えられ、これからはそこが四人の生活の場となる。

数週間が過ぎたころ、ダーレー州都からはるか東、グロースターク公国に戻ってきた間諜がひとつの事実を告げた。その国都の居城に、この乱を招いた張本人、アーマリン・レイズアがいる。

女と見まごうほどの線の細さと美しさのなかに、氷のような冷たい瞳。長い銀の髪がかすかに揺れた。

唯一王家のなかで魔力をそなえて生まれたのは、このアーマリンだけだ。当然その王座は自分に与えられると思い、天啓を待っていた。しかし、いつまでも天啓は現れず、その矢先に長兄であるユーパが仮王を名乗ったのだ。

民へと向けられる魔力は、その輝きを失い、ついに天に背いた。

「ふん、失敗したか」

祭祀場の中央には水を張られた大きな銀盤がある。それを覗き込みながらアーマリンは鼻を鳴らした。

「ウエーマー」

祭祀場のすみに控えていた男は、その名を呼ばれると、巨体を一歩前へと進ませた。

「ゴドルフィン公国を動かせ。お前は中軍を率いて合流し、ダーレ州を攻めよ」

一軍は十万の兵力を指す。この国には上軍、中軍、下軍、新軍、烈軍、金軍の六軍。そして三万のゲノ軍が控えている。この中に警備部隊も含めれば、ゆうに八十万を超える大軍団が出来上がる。

ウエーマーは頭を下げたまま、

「ゲノは……」

と、問うた。

「三千もあればよからう」

「お言葉ですが、それでは非才の私には荷が重うございます」

この将は歴戦の常勝將軍といってよく、軍紀を重んじ、したがって暴走する恐れのあるゲノをあまり使いたがらない。思いがけないウエーマーの言葉を受け取ったアーマリンは片眉をあげた。

（ほう）

ゲノー一匹は一人の兵士の十倍に相当するといわれている。が、ゲノは敵軍に恐怖を与えるというのが最大の武器だ。

ゲノ部隊が突進してくる姿に先陣はすくみ上がり、実力の半分も出せない。そしてその恐怖が敵陣に伝染し、軍を総崩れに追い込むのだ。実質十三万以上の兵力といえるだろう。

そのやりとりを眺めていた他の官僚が、代わって身を進めた。

「恐れながら申し上げます」

非を鳴らそうという意図に、アーマリンは冷たい目を向けながらも

「カーネギーか、申せ」

と、許した。

「ダーレーを陥落させても、その背後のクリスエス公国を取り込まねば孤立し、経営を維持するのは難しくなりましょう」

「維持すると誰が言ったか」

ハイペリオン国都があるバイアリー州は、中央よりやや西方に位置する。そのさらに西にダーレー州があり、そのさらに西。この大陸の西端にクリスエス州がある。

反旗をひるがえした六州のなかで、五州は同盟関係をすでに結んでいた。

しかし、クリスエス州も独立を宣言したが、唯一どちらの勢力にも与しない中立を保持している。いま各州は、常にこのクリスエスの動向に注目せざるを得ない。

どちらにつくかで、その勢力図が大きく塗り替えられる可能性があるからだ。

「維持はせずとも、バイアリーからは背後をつかれる形になり、攻

めるのも容易とは思われませぬが」

「では北のエクリプスからバイアリーに圧力を加えよう。カーネギー、貴様がやれ」

難しい仕事をおしつけられた、と、カーネギーは脂汗を浮かべたが、

「御意」

と、頭を下げたあと引き下がった。

「では、ウエーマー。どれほど必要か申せ」

「一万。そして烈軍」

その数に側近らは小さく驚きの声を上げた。現在、バイアリーへ向けた上下軍に、すでに一万のゲノが投入されていた。残った兵力の半分に迫る数だ。

「クリスエスも陥とす気か？」

アーマリンは聞いた。

「そうすれば、すべてが平らかになるでしょう」

平らかとは、大陸の統一を意味する。その意味を汲み取ったアーマリンは、命を下した。

「許す。西の地を我に与えよ」

「御意」

これらのやりとりを見ていて顔色を変えた閣僚がいた。ハイペリオンの間諜であるウォツカだ。庁議が終了するなり自邸へ戻り、二人の配下を呼んだ。

「ことは急を要する」

グロースターク、中軍を発する。

その報せは夜になって早馬とともに西へと飛んだ。

臣下らを下げたアーマリンは、まだ片隅にひとり残った神官長に言った。

「予言の時まで時間が無い」

「ですな」

「ゲノをあと一万、降ろしたいが」

「そうですな、女が足りませぬ。さしあたりゴーク帝国から五千ほど入れてもらいましょう」

「あとは、ダーレーから調達するしかないか」

呟いたアーマリンはそのままベランダへ出ると、夜空を見上げた。

（大砲も足りぬ）

ハイペリオン王国首州であるバイアリー州は天然の要塞といえる。雲を貫く山脈が州を取り囲むようにそびえ、わずか三方に開いた険所以外に軍を進める場所は無い。

その険所にはとうぜん巨大な要塞が築かれ、地形を利した防衛能力は、万のゲノを突きつけたとてビクともしなかった。

そこにゴーキ帝国から新兵器がもたらされた。この国にはない大砲という兵器だ。

だが、いかんせんまだ数が足りない。ゴーキ帝国は大砲を供給するかわりにゲノ兵を要求してきていた。ターントウでさらなる恐怖政治を行うために、絶大な効果をもたらすだろう。

お互いに利害の一致を見た貿易といえる。しかし、ゲノは魔族とはいえ生き物であるため、計画通りに供給できるわけではなかった。

グロースタークを発した二人の使者は途中で道を分かち、ひとりバイアリーへ、もうひとりはダーレーの宮殿へと飛び込んだ。

ダーレーの庁議は騒然とした。

「将はウエーマー。中軍と烈軍、そしてゲノ軍が一万。ヨド山脈の南を回って進行し、ゴドルフィン公国からの軍と合流して攻め入る模様です」

急使の言葉に、庁議に列席している閣僚たちは青ざめた。グロースターク軍だけでも二十万という大軍容に加え、ゲノ兵が一万。さら

にゴドルフィン軍がどれほど合流するのかわからないが、恐らく五万はくだるまい。

「本国から軍を出して、背後を突いてもらうしかありますまい」

それは常道だろう。しかし、北からエクリプス軍が本国に侵攻すれば、こちらへ軍を回す余裕があるだろうか。

「どうでしょう、和議を申し出ては」

打つ手に窮した議論のなかにあつて、高官の位にあるブリユネルの言葉が響いた。

「和議とは――」

その言葉に、さすがのクララも表情にけわしさをのぼらせた。その言を下げようとした矢先、怒声が脇のカーツから発せられた。

「何を言われるか！」

これはクララの意図を素早く汲み取ったものではない。本心からの怒りだった。

「グロースタークがどのような国か、貴殿も知らぬわけではあるまい。その国にひれ伏せば、このダーレーが暗黒に包まれる」

しかし、ブリユネルも引かなかった。

「国主アーマリン殿はクララ姫の実兄です。手荒な処遇になるとも思われませぬが」

クララ姫を救うにはそれが最善である。と、確固たる信念を示した。

「カーツ將軍は、クララ姫の御身がどうなろうとかまわぬとおっしゃられるのですか？」

「そうは言っておらん」

「では、どのような手が残っておると。どのようにクララ姫をお救いするとおっしゃられるのか」

その議論を遮ったのはクララの声だった。いつもの柔らか味のある声ではなく、言葉の根底に威厳がこめられている。

「民をないがしろにして、私の存在があらうか」

群臣らははつと顔を上げた。

「民の血は私の血であり、民の肉は私の肉である。血肉を失って私の生きる道があらうか。講和はありません。これ以上その献策を許しませんよ」

（青臭いことを）

その言葉を聞いて、ブリュネルは小さく舌打ちをした。

「カーツ將軍」

「はい」

「一軍を率いて防ぎなさい」

「御意に」

「ただし――」

クララはカーツを見据えて言葉を続けた。

「ことの如何に関わらず、必ず復命をしなさい」

復命をするということは、ここに戻ってきて結果を報告するという
ことである。つまり、死んではならないという命令に等しい。

カーツは深く頭を下げて拝命した。

その頃、テトラとマークは、カーツの腹心ともいうべきニキーヤに
講義を聞いていた。カーツに養われるようになってから、連日この
国の情勢を詳しく知ろうとやっきになっていた。

敵を知らなければ戦は始まらない。それがテトラの持論である。

テトラとマークの質問は、ニキーヤの知らないところにまで及び、
時折りあわてさせた。地図を開き、道を示し、豪族の関係、血縁、
民の情勢、法と、聞くべきところは多岐に渡った。

その中で、ニキーヤはテトラの驚くべき分析能力に驚嘆していた。

（ただものじゃないぞ）

流れ者の海賊と聞いた当初、この国のことを教えてほしいと言われたニキーヤは、殊勝なこともあるものだ。と、軽く考えていた。が、その内容は想像をはるかに超えるものだった。

（どのような戦をしてきたのか）

敵国に対する目の置き方が根本的に違う。と、感じたニキーヤは、襟をただしてテトラに対するようになった。

もちろんスパチャホフとチェリーには、そんな小難しい話など聞く気も無い。毎日ぶらぶらと遊んでいるだけである。

今日は店が開くのをまって、朝から街の質屋を歩き回っていた。

「おやじ、どうや。これだけのもんはなかなかないで」

こぎれいなカウンターにどんと置いたのは、先日下賜されたばかりの黄金の胸当てだった。

「ほほお、これはすごい」

こんな店にこれだけの品が入ることなど開店以来だろう。店の主人は目を丸くして、その品に手を伸ばすと、右に左に向きを変えては魅入っていた。

と、曲線をなでていた指が止まった。

スパチャホフはあわてたように、その胸当てを手元に引き寄せると、主人に即決を迫った。

「どうや、ええ品やろ。幾らだしてくれんねん」

「いや、ちよつと待ってくれ。いま、チラッと紋章が見えたんだが」

「なに言つてんねん、老眼鏡がいるんちゃうか？」

「いや、見間違ひとも思われん。もう一度よく見せてくれ」

スパチャホフはしぶしぶその胸当てをもう一度おろした。

「おお、やはり王家の紋章。ど、どうしてこれを？」

元来このようなものを庶民が持っているわけがない。いぶかしさをあらわして、主人は身構えた。

「いや、あのな。姫さんから貰たんや」

「クララ姫さまから直々に——もしや、あなたさまはゲノ退治の？」

「まあ、そういうことや」

「なるほど、そうでしたか。いや、しかしこのような物をお預かりするわけには参りません。王家の紋章が入ったものを流したとあつては、不敬罪でわしの首が飛びますでの」

そう言った主人は、手のひらで自分の首をはねる仕草を試みせた。

「なあ、頼むわ！」

「無理をいわないでくださいよ」

「どうしても金が必要なん！」

「そんなこと言われても」

「どうしてもズボンが欲しいねん！」

スパチャホフの願いもむなしく、この店でも預かってはくれなかった。

ふたりがカーツの私邸に戻ると、門衛から

「主がお待ちでございます」

と、声をかけられた。

「なんかあつたなりか？」

「さてな、ズボンの一本も調達してくれへんジジイなんぞどうでもええわ」

この屋敷に来てからというもの、食べ物と酒には困らない。しかし、なぜか肝心の衣服だけが手元に届けられなかった。

広間に入ると、カーツをはじめ、ニキーヤ、テトラ、マーク。そして屋敷のおもだった配下が重苦しい雰囲気の中にいた。

スパチャホフとチェリーを見つけたテトラが声をかけた。

「戦だ」

「ほおう、稼ぎ時ってことやな」

眉をしかめたチェリーとは対照的に、スパチャホフは口端をあげて笑いをつくった。

軍を率いるのは当然、カーツ將軍。テトラたちは客将ながら、部隊長に据えられた。およそ一千人を率いることになる。

そして軍容は総軍五万。しかしながら、純戦闘員は三万ほどだ。一軍とはいえ、グロースタークの軍容とは較べるまでもない。劣勢は火を見るより明らか。さすがにどの兵にも悲愴感が漂わせて出兵の準備を行っていた。

そんな中であつて、テトラはぼんやりと城壁に座って外の景色を眺めていた。

「テトラ殿には緊張感の微塵も感じられませんね」

その声に振り向くと、ニキーヤが立っている。こちらあまり緊張感をみなぎらせてはいないようだ。

「そんなこともねえけどな」

「そうですか。何か秘策でもあるかのような余裕に見えますが」

言いながら、ニキーヤは横に腰をおろした。

「おいおい、副官さんがこんなところで油売ってて大丈夫か？」

「少しくらいなら大丈夫ですよ。テトラ殿と軍議をしてたとも言
い訳しておきます」

城内は騒然となっている。武器、食料、工作材料や馬がぞくぞくと
集められ、いたるところで家族との別れを惜しむ兵たちの姿が見受
けられた。

それを眺めながら、ニキーヤが口を開く。

「テトラ殿には勝算があると思われませんか」

静かな口調に、怯えの色が混じっていた。単純に考えて、圧倒的な
軍事力の差がある。まともにぶつかっては勝負にすらならないだろ
う。

「さあな、実際に手合わせしてみねえと。ただ……」

「ただ？」

「兵を出す前から勝負は始まっている。打てる手は打っておくべきだ
ろうな」

「と、言いますと」

先を急ぐニキーヤをじらすように、テトラはニヤリと笑う。

「まずは……」

周囲に人影が無いにもかかわらず声のトーンを落とした二人は、
い
つまでも城壁の上で話し込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5042b/>

ハイペリオン戦記

2010年10月12日19時30分発行